

# 肉屋の少年

〇〇五  
(ぜろぜろふあいぶ)

## 【はじめに】

このお話は、TRPGサークル「白鳥亭」において実施されたオンラインのキャンペーンセッション「エネやん、ダマやん、ポンさんのアランシア道中」にて生まれたプレイヤーキャラクターの「肉屋のポンペ」の物語です。

肉屋のポンペが関わる冒険の一部は、ぶーすけさんにより動画化（「えだぼん珍道中」）されています。

作中、ポンペの話す言葉が極めておかしいのは、このセッションで生まれた設定によるものです。パーティー構成がドロンボーと同じで、かつ、パーティーメンバーのダマカスの風貌がボヤッキーみたいだったことから、ポンペはたてかべボイスで会話するべきだろうということになりました（空気を読みました）。

キャンペーンが進むにつれて、この他にもポンペには色々とおかしな設定が生まれましたが、今回の物語も、その過程で生まれたものだと言えます。

セッション中のノリと勢いで生まれていく設定ほど、後日整合性に苦しんだりするのもかもしれませんが、私はそうしたやりとりを通して生まれた突発的な設定を愛おしく思っています。テーブルトークによって生まれたものは、様々な要因が重なり合って、その瞬間にしか生まれ得なかったものであり、さらに自分一人では生まれなかったことを思えば、それだけで奇跡性を感じてしまうのです。

アドバンスト・ファイティング・ファンタジー第二版は、システム自体がそれほど重いわけではないので、ロールプレイに集中できます。また、背景となる世界設定がしっかりしているので、没入感がすごく深くなります。

これらは、このシステムの好きなところであり、他に替え難い魅力を感じているところです。

## 【参考文献】

- I・リビングストーン／松坂健訳『運命の森』（株式会社思想社 1985）
- S・ジャクソン&I・リビングストーン、グレアム・ボトリ／安田均他訳『アドバンスト・ファイティング・ファンタジー第2版』（株グループSNE 2018）
- S・ジャクソン&I・リビングストーン、マーク・ガスコイン／安田均訳『ダイタン』（株グループSNE 2018）
- S・ジャクソン&I・リビングストーン、グレアム・ボトリ／安田均監修・こあらだまり・春駒篤訳『ヒーロー・コンパニオン』（株グループSNE 2020）
- S・ジャクソン&I・リビングストーン、グレアム・ボトリ／安田均監修・こあらだまり・春駒篤・飛竜賢訳『ポート・ブラックサンド』（株グループSNE 2020）
- S・ジャクソン／安田均訳『モンスター誕生』（株グループSNE 2021）
- S・ジャクソン／安田均訳『トロール牙峠戦争』（株グループSNE 2021）
- S・ジャクソン&I・リビングストーン、グレアム・ボトリ／安田均監修・こあらだまり訳『破滅のデーモン』（株グループSNE 2022）
- S・ジャクソン&I・リビングストーン、アンドリュー・ライト／安田均監修・飛竜賢訳『魔界ガイドブック』（株グループSNE 2022）

このお話は以上の書籍をもとに作成した二次創作です。

アイギナ 現在

出ていくときも大騒ぎだった。ただでさえ大きな体なのに、細かくせわしくなく動き続けている。挙句おかしなイントネーションの大声でまくし立てる。

「絶対、大金抱えて戻ってくるぞ」

「ああ、はいはい」適当に頷き返し、私は手向けの言葉をかける。

「変なものを食べたり飲んだりしちやダメ、わかった？」

「おう！」

艶のある革製の縁なし帽をぎゅつと引つ張るようにしてかぶりながら、ポンペは背負い袋を大きな背中に担ぐ。

「ほな、いつてくるぞ！」

腰のベルトに使い慣れた棍棒を一本ぶら下げて、その柄をぐいと一度握って振り返った表情は、こちらがついつい引き込まれて一緒に笑ってしまふような、夾雑物の一切ない、完璧な笑み。

ドアが勢いよく閉まるとほぼ同時に、「あれ？父さん、もう行っちゃったの」と、店の正面の鎧戸を閉めて戻ってきた息子のポルコが、あっけにとられた様に部屋に入ってきた。

「最後に何かあるのかと思っただけ」

「そうそう、これ、あなたにとって、預かってるわ」

私は、ポンペが置いていった、猟犬を象ったフオーガの聖印を息子に投げ渡した。

「聖印をそんな風に扱わないでよ！」

息子は誰に似たのか、常識があり、少し心配性なところがある。私に似たのだと、臆面もなく言えるような生き方を、当の私もしてこなかったの、案外、ポンペに似ているのかもしれないと思うこともある。

ただ、外観はまったくといっていいほどポンペには似ていなかった。腺病質で神経の細かそうな外観の息子は、案外今回の出来事を僥倖ととらえている節があった。

「肉屋を継ぐなんてできないよ」と、私にだけ打ち明けてくれたときの息子の表情を思い出す。息子は当然のことだが、ポンペを愛している。それだけの愛情を受けて育った。だが、それだけにポンペの想いを継承できないことを申し訳なく思っているのだ。

ストーンブリッジでは少々名の知れたポンペの肉屋は、本日をもって閉店する。そのことが、息子の心の重荷の幾分かを減らしたことは間違いない。

組合の検査という名の妨害工作に、ポンペの堪忍袋の緒が切れたのは当然だった。もともと、彼の商売を妬む人間は多かった。ドワーフのまちであるストーンブリッジでは、人間はドワーフの決めたルールの中で暮らしていくしかない。ポンペはドワーフに育てられ、ドワーフの中で成長した。十三歳からアランシア中を修行してまわり、二十歳を過ぎてから帰郷したが、彼の思考のベースにはドワーフ的なものが横たわっている。そんなポンペがストーンブリッジで頭角を現していくのに時間がかからないのは当然だった。肉屋の先代の名声も手伝って、ポンペの肉屋は、開店からこれまで客の途絶えたことはなかったのだ。

同じ人間でも、ポンペに対する時とドワーフたちの反応が露骨に違うのは、致し方のないことで、それが悔しいのであれば、努力すればいいだけなのだが、妬みや恨みを活動の原動力とする人間は、一定数、それも地位や名誉をそこそこ保持している者の中に居るのは、人間社会のさかといえ、なんとも悔しいことだった。

これまでの累積もあつたし、自分を明らかに舐めた露骨ないやがらせにおとなしくしているポンペではない。その場で組合の派遣した検査官の胸倉をつかんで投げ飛ばしてしまった。私なら、口すぼみでもかけてやって、にやついて留飲をさげるところだが、無論、ポンペにそんなことはできない。彼は彼なりに自分の怒りを顕現させたのだ。

商品の質を守るため、組合の定めた基準は色々細かい。だがポンペがその基準を満たさなかったことや、利益を重視してごまかすようなことはこれまでなかった。そもそもそんな必要性のある仕入れも人付き合いもし

ていないのがポンペの商売だったのだ。

検査官が指摘したのはあきらかに濡れ衣で嫌がらせ以外のなにものでもなかったのだが、ポンペの反応は激烈に過ぎた。品質管理を至上の目的とする組合の派遣した検査官への暴力行為は、店の存続を困難にさせた。結果、ポンペは責任をとるかたちで店を閉めることになった。ポンペに同情的なドワーフたちや一部の人間は、とにかくほとぼりが冷めるまでどこかで商売を続けることを提案した。だがポンペは、いったん失った信頼を取り戻すのは容易ではないとまじめに考えた。そして、とにかく商売は休業して何か別の方法で店の再建を目指すことに決めたのだ。

何かあてがあるわけではない。だが、一度思い立ったなら、一直線に突き進んでいくのが肉屋のポンペだ。

その一直線のポンペに出会えていなければ、現在の私はいない。

彼が閉じていったドアを見ながら、私はポンペの旅の無事を祈った。

そういえば、あの時も、私はポンペの無事を祈った。だから、そう、今度も、きっと、大丈夫。

間違いなく、笑顔で帰ってくるだろう。

その予想は、願いというよりも確証に近く、私の心を満たす。

そして、何の確証もない中で彼の無事を祈ったあの瞬間を、はじめて神の存在を感じたあの出来事を、自然と思いつ返していた。

## ↳ストーンブリッジ 二十二年前↳

濃い霧に覆われた石造りの古い家並みを、寄り添うような二つの影が、互いにもつれあってもがくようにして、足を進めていた。

やがて二つの影は、まちはずれの崩れ落ちそうな小さな建物の前で止まると、腐朽して苔むした、もはや扉の用を果たしていない、かつての扉板だったものを押し開こうとした。

「何をしている？誰だ、お前たちは？」

誰何の声が背後でして、二つの人影の内、小柄な方がさっと振り返る。

そこに立っていたのは、髭だらけの顔に怪訝そうな表情を浮かべた、小柄だが着ているシャツを内側から突き破らんばかりに発達した胸板をもったドワーフだった。小柄な方は素早くドワーフの手を取って、小声で何かを囁いた。

途端に、警戒と不審で凝り固まっていたドワーフの巖のような表情が、はにかむようなものに変わった。

「……ん、まあ、なんだ、おたくらみたいなのに、この家はあまりにボロで、似つかわしくなかったんでな……ついつい声をかけちゃったんだ」

「いいの、わかってる。だから、まわりの人たちに変な誤解を持つてほしくないから、ここに私たちがいることは、他言しないで欲しいの」

小柄な方は、ドワーフの無骨な手を握る掌に力を込めた。ドワーフは小柄な方の顔を覗き込むようにして、大きくうなずいた。

「わかった、おたくらがここにいるということとは、誰にも言わない」

「ありがとう、助かる。もう、行っていいわ」

小柄な方が、囁くように柔らかく告げると、ドワーフは名残惜し気に二つの影を何度も振り返りながら、霧の向こうへ去っていった。

「アイギナ、いけないわ、その力を安易につかっちはいけない」

「アイギナ」と、黒いローブをまとった方の人影に呼ばれた小柄な方は、がたがたと音をさせながら扉板を外す作業にかまけて、その言葉に何の反応も示さなかった。

「お母さん、開いたわ」

アイギナは、その声をかけると、黒いローブの裾を引いて、母親を建物の中へ招き入れた。

建物の中は、ひどい状態だった。黒い三和土の上に、かろうじて脚の遺った椅子が一脚、奥に竈、そして、壁際に大きな戸棚が一つ据え付けられていて、その上には、かつての何かの残骸が黒い影を落としている。黴と鼠の糞尿のおいが入り混じった、言いようのない不快な空気が充滿している。長い期間、人が足を踏み入れたことが無いのは明らかだった。

椅子の残骸が、人の体重をまだ支えることができるのを、自分で座って

みて確かめてから、アイギナは、母親をその上に座らせた。そして、微かに何事かつぶやくと、掌に小さな炎が現れて、薄暗い建物の中を照らした。その動きはあまりに自然で、アイギナがその能力を日常的に行使していることを示していた。

アイギナは三和土の上に散乱している何かの木切れの先を掌の上の炎に当てて火を移すと、竈の中にそれを入れ、建物の中に落ちていている建具の破片や、かつての家具の残骸を拾ってはくべていった。

建物の中に、温かい空気と、木切れが燃えて爆ぜる音がし出すと、母親はアイギナの手を引いた。

「あなたには、本当にすまないと思つています。あなたがいなければ、私だけでは、ここまでこれなかった。でも、約束してほしい。その能力を簡単に使わないと。そうしてくれなくては、何のためにバシンが私たちを逃がすために犠牲になったのか、わからなくなってしまう」

アイギナは、いぶかし気な表情をして、座つて自分を見上げている母親の顔を見下ろした。

「私たちが無事に逃げきれなければ、父さんはそれこそ浮かばれないわ。だから、私はなんでもやる。できることをやりきつて、あいつらの裏をかいて、生き延びてやる。だつて、それは父さんと約束したことだから」

力に満ちた硬い声音に、母親は眉をひそめた。悲し気に首を振ると、視線を下に落とした。自分の体が、もう逃避行に耐えられなくなっていること、娘の能力が日に日に高まっていくことへの恐れ、そして、亡き夫の故郷へたどり着いたという安堵感。複雑に絡み合った感情を整理する暇はなく、ただ、夫と自分が恐れ、絶望的な逃避行へと駆り立てたものが、ほんの数瞬先に迫ってきていることが、強烈な切迫感として母親を襲った。

目の前の、父親に似た、幾分勝気そうな表情の娘を見ながら、その裏に潜む存在のことを思つて、身震いするほどの恐怖にさらされる。娘を救わなくてはならない。亡き夫が今際の際に自分に託したのは、娘を救つて欲しいという願いだった。

夫の最期の表情を思い起こしながら、母親は、娘に告げなくてはならな

いとずつと思つていたことを、告げる決心をした。

「アイギナ、聞いてほしいことがあります。ここ、ストーンブリッジへ来た理由です」

顔をあげた母親のやつれた表情に、アイギナは改めて、自分たちが過してきた、ここ数か月の逃避行の過酷さを思つた。そして、父の命を奪い、自分たちを執拗に付け狙う存在への怒りが激しく心の中に巻き起こるのを覚えた。

怒りが心の中を満たすと、その声は話しかけてくる。

聞き取りづらい、かすれた老人の声。男なのか女なのかも明瞭ではない、微かに高く柔らかいが枯れていてぎすぎすした声、そして、アイギナにだけ聞こえる声で。

……力が、欲しいか？その怒りを、まっとうな力で発露し、お前を虐げる者、お前の大切な者たちを害せんとする者たちから、お前とお前の大切な人たちを守りたくはないか？

アイギナは、その問いに答えたことはなかった。答えた時、自分の中の何かが決定的に変わるといふ、微かな予感だけはあった。声が聞こえ始めたときがいつだったかは、忘れてしまった。それほど、声は、物心ついた時から傍らにあった。長い間、アイギナはその声を無視し続けてきたが、その声は狡猾で執拗だった。時に甘く、時に辛く、罵倒と賛美を繰り返し、アイギナの自尊心を打ち砕いては再構築し続けた。そのようにして、声はアイギナを籠絡し、彼女自身から何かしらの報酬を得ようとしているのは明らかだった。答えたら、何が起きるのか、何を得て、そして失うのか。

アイギナは、母親の言葉に耳を傾けている態をとりながら、心の中に囁きかけてくる声にじつと聞き入っていた。

いつか、この声に答えてしまう自分を、大きく何かしらに変わってしまった自分を夢想しながら……。

まちはずれに魔女が住み着いたと、ワイらの中では噂で持ち切りやった。「黒いローブを着た魔女らしいで」

友達とさんざん遊び惚け、日が暮れて店に帰ったワイは、店先で売り物の肉が入っていた石皿を片付けている親方にそう言った。

親方はじろりとワイに目を剥いたが何も言わずに、そのまま作業を続けた。今日も肉は売り切れだった。いつものことだけど、加工したのもそうでないものもきちんと売り切れる。

親方はこの辺りで一番有名な肉屋だった。年老いたドワーフで、いつも気難しそうな顔をして無駄口は叩かないし、道理に合わないことや、邪なことには烈火のごとく怒りだす。かといって、もの分りが悪いかと言えば、見習いのワイが外で友達とふらふら遊んでいても、それをとがめることはない。子どものうちは、遊ぶのも大事なことでということ、火酒を飲んで少し機嫌のいいときにぼそりと言ったことがあったが、そういう砕けたところもあった。

ワイは肉屋の手伝いをしながら、親方と二人で暮らしている。

肉屋は、家畜や猟でとらえた鳥や獣を買い取り、屠殺し、精肉となるまで肉を調整し、さらには干し肉や腸詰などの加工を行った。なので、一日中忙しい。親方みたいに家族が誰もおらんで、一人で切り盛りしているところはなおさらだ。それでも親方は、ワイに読み書きを教えてくれるまじない師の家へ通うことや、そこで知り合ったドワーフや人間の子どもたちとたまに遊ぶことを許してくれた。

ワイが親方と暮らし始めた頃の記憶はない。親方がいうには、ワイは捨てられていた子どもだったようだ。本当の親が誰か知りたくなったり、それが高じてあてもなく探しに行く人もいるようだが、ワイはあまり気にしていない。ワイには親方と肉屋でくらす生活が物心ついたころからあったし、それ以上のものを必要だとは感じていなかった。

「西の海に面した大きなまちで拾ってきた」というのは、親方から聞いた

ていたが、正直、ワイが捨てられていたまちを訪ねたいなどと思ったことはなかった。何より、ワイは、親方とこのまちが好きだった。

「親方は魔女に逢うたことはあるか？」

ワイの質問に親方は、手を動かしながら、何も答えなかった。

「何やらワイら全員頭の頭をおかしくする薬とか、イヌとサルを掛け合わせた生き物とか作ってるいう噂やけど、そんなことして何になるんやろな」ワイの軽口は、親方の背中には届かんかった。ふと気づくが、だいぶ背中が小さくなっていた。前はもつと筋肉が盛り上がっていて、頼りがいのある背中だった。いつからこんなに薄く筋張った背中になっていたんだろ。ワイはふと、もの悲しくなった。明日はどこにも行かずに、親方の手伝いをしようと、不意に思う。

唐突に、「あそこには女の子がいるな。お前と同じくらいのと、ワイを振り返って親方が口を開いた。

「知ってるんか？ 魔女の家やで」

ワイの問いかけに親方は頷いた。

まちはずれに住み着いた魔女の噂は、子どもらの中だけのことで、大人は気付いていたのか、気付いていても関わり合いになりたくないと思っていたのか、まったく口の端に上る事すらなかった。ワイは、まちな人間関係や他人の噂に、みごとに無関心で無頓着で有名な、ほかならぬ親方が魔女のことを知っていたことに驚いていた。

驚いたワイを後目に親方は言葉を継いだ。

「魔女の家も何も、まちの中にある建物だ、知らない場所ではないし、用があればその前を通ることもある。女の子だ、お前くらいの。もつとも、ひどく痩せている」

親方はそこまで言うのと、天井からぶら下がっている鉤の先の腸詰を指で指し示すと、ワイに命じた。

「明日、これをその娘に届けてやれば、いい。どこから流れ着いても、このまちに入れば、仲間だ。それはお前が一番よく知ってるだろう」

魔女の家へ行くことを思って、好奇心と恐怖とで、ワイの頭の中はぐる

ぐるりと旋回した。難しいことや悩ましいことは苦手やった。だが、親方の命令は絶対だ。ワイは、こくりと頷いた。

翌朝、ワイは腸詰と大きめのパンの塊、そしてチーズの入った籠を持って、まちはずれの古びた家の前に立っていた。

傾斜のきつい切り妻屋根の軒先は折れて曲がり、窓枠にはまっついているガラスもあちこち割れている。漆喰で塗りこめられた外壁もこここが落剥していて、中から下地の土壁をのぞかせている。

ぞつとするような苔むした入口のドアの前で、ワイは呼びかけた。

「すいませーん、誰かいますかー？」

「そこには、誰もいない」

不意に、背後から声がして、ワイはよろめくほど驚いた。振り返ると、そこには朝の日の光を浴びて、女の子が立っていた。

澄み切った秋の日の空のような青い瞳がすっと細められ、ワイを値踏みしているかのように、注意深く動いている。朝日を浴びた女の子の頭部は、耳元を隠すように布で巻いてまとめられている。まとめきれなかった長い髪の毛の先が肩へ流れるように幾筋か落ちてきている。色はけぶるような濃い金色で、ふいにワイの方へ一歩踏みだした女の子の身動きとともに律動的に揺れた。

思わずワイは叫ぶように声をあげた。

「親方が、これを持っていけつて。痩せているから、食べるつて」

勝気そうに尖った鼻先をうごめかせながら、目の前の細い肢体の女の子は口を開く。

「施しは受けない」

断固とした拒絶の意志のこもった冷たい平板な口調で、女の子はワイを見る。

改めて女の子を見ると、小さい口元には力が入り、頬の筋肉が緊張している。ほっそりとした首筋から肩先にマントのようなぼろぼろの布をまとっているが、足元は丈の短いズボンから、木の小枝のような細い脚がむき出しになっている。全体的にぼろぼろで痛々しく、風雨に幾日もさらされ、

飲むや食わずでここまでやってきたことがうかがい知れた。

きゅつと胸が締め付けられるような憐みの気持ちで、ワイは口を開いた。「せやけど、腹がすいとんのやろ？そんな恰好見てたら、放っておけん」

「二度と、ここへは来ないで」

女の子はワイの視線を真正面から受けて、小さな唇を開き、冷たく言い放った。

このまま何もせずに戻っては親方に叱られてしまうという気持ちと、目の前の哀れな存在に何かしてあげたいという気持ちがないまぜになって、ワイはどうしたらいいかわからなくなり、女の子の視線を受けながらそのまま動きが止まってしまった。

女の子は、鋭い拒絶の意志を視線の先に込めて、ワイに対峙している。ワイは何も言えずに、かといって、何もできずに、ただただ視線を地面の方に落としてたはずんでいる。静寂が二人を包む。

不意に、崩れかけた家の中から、小さく咳き込むような音がした。

「誰か、おるんか？」

思わず家の方を振り返ろうと体をねじった瞬間だった。きつと、ワイの体が動き出すタイミングを女の子は狙っていたのだと思う。途端に足元が払われて、ワイは大げさに尻もちをついた。次の瞬間には女の子が馬乗りになって、ワイの目の前に小型のナイフの刃先が突き付けられていた。

「二度と、ここには来ないで。わかつた？」

身に着けているものはことごとくぼろぼろで、肌も薄汚れている。けれど、目の前で見た女の子からは不潔で不健康そうな印象は受けなかった。激しい意志の宿った青い瞳、白くて広い額から、尖った勘の鋭そうな鼻先までのライン。こけた頬は、怒りか緊張かはわからないが、上気して赤みがさしている。微かにひび割れた小さな唇から、白い歯のぞく。敏捷な身のこなしと、歯切れのいい物言い。女の子に対してワイは、強烈で清冽な印象を感じていた。そして、この数秒の間に、憐みなのか何なのか、この子が気になってしょうがなくなっていたのだ。

「いやだ」

我知らず、ワイはそう答えていた。女の子の顔が、冷たく無表情に変わる。無言でナイフの柄を握りなおしたのがわかった。思わず目を閉じる。

「誰か、来ているのね？」

家の中から、高く澄んだ声が聞こえた。目を開いたワイは、女の子がナイフを瞬時にズボンのベルトの裏に差し込むのを見た。

建て付けの悪いあばら家のドアが内側からぎしぎしという音とともに開く。

「お母さん、起きちゃだめ」

女の子がワイから身を放してドアの方へ小走りに向かう。女の子の向かった先には、フードのついた黒いローブを着た、青白い肌に、驚くほど白くて長い、それ自身が光を放っているかのような髪の毛、ほっそりとした女性立っていた。

駆け寄ってきた女の子の頭をひとなでしてから、女性はワイの方に向きくりと歩を進めてきた。その足取りはふらふらと危なっかし、女の子がその傍らを気遣うようにして歩く。

先ほど女の子に転ばされたワイの手から離れた腸詰の入った籠に気付くと、女性は染みわたるような笑みを浮かべた。

「私たちに？」

魅入られるようにワイはこくりと頷くと、うやうやしく籠を差し出した。

「本当にありがたいわ」

女性は笑みを浮かべたまま、ワイの手から籠を受け取った。

「あの人が言っていたように、ここはいいところのようですね」

ワイは、女性の顔を見上げた。ワイは同じ年頃の連中の中では比較的大柄な方だったけど、女性はそのワイよりもだいぶ背が大きかった。

「お名前を教えてくださいな」

「ボンペです」

「ボンペさんは知りませんか？このまちに、いらっしやるという勇者を。名前はキルデリク。アランシアでは、ジリブランに過ぎたるものが二つあ

りと巷間言われています。ひとつは戦槌、あらゆる戦でストーンブリッジに勝利をもたらした魔法の宝具にしてストーンブリッジの象徴。ひとつはキルデリク、万夫不当のドワーフの中のドワーフ。ジリブランの危難を幾度となく救い、ストーンブリッジを守護し続ける生ける神話。名前くらいは存じているでしょうか？」

その名は聞き覚えがあった。ただ、その名前はあまりに身近で、ワイには同じ人物のこととは思えなかった。

「……知ってるけど、勇者のキルデリクは知らん。ワイの知っているキルデリクは、肉屋やで」

だから、違うドワーフのことを言っているのだと思った。ワイの頭の中で、勇者と呼ばれそうなストーンブリッジのドワーフが浮かんで消えていくが、女性のいうような神話と呼べるような活躍をしているかどうかと言われれば、今一つ納得できるような存在には思い至らなかった。

「知っているんですね。よかった、キルデリクさんは、本当にここにいらっしやるんですね」

女性のからだがぐらりと揺れ、少女がその身を必死で支える。ワイは思わず少女の傍らからで女性の体を支えていた。

「すいません、少し安心したら体から力が抜けたみたいで」

ワイと少女は女性を抱えるようにして、家の中に入り、寝床というのはあまりにお粗末な古衣やボロキレなどを敷き詰めた場所に女性を横たえた。横になった女性は目を閉じたまま、吐息を漏らすように呟く。

「本当に、キルデリクは居た、本当によかった」

そのまま、女性はすーっと息を吐きだすと静かに寝息を立て始めた。途端に、女の子が跳ね起きるようにして、ワイに対峙する。

「アンタ、さつきキルデリクを知っているって？」

鋭く叩きつけるような声がワイに向けられる。

「言うたけど、この人のいう勇者とかではないよ」

「そうそうキルデリクが何人も居てたまるか」

女の子が吐き捨てるように言うのを見て、ワイは大事なことを言うのを



忘れていたことに思い至った。

「火口箱も持ってきた。腸詰は焼いてもゆでても、うまいで」

そういうワイをちらりと見遣った女の子は、目をつぶってから手のひらを天井に向けて体の前に差し出すと、小声で二言三言何かをささやいた。次の瞬間、手のひらの内側にぽつと小さな炎が立ち上がる。瞳を開いた女の子は、その炎を、慎重な手つきで床に落ちていた木切れに燃え移らせ、家の隅に崩れ落ちたようになっていいる竈まで持っていっていった。

作業を続けながら、女の子は背中でワイに声をかける。

「アンタの知っているキルデリクを、ここに連れてきて。食べ物のお礼もしたいし、何より、お母さんはここを動けない」

女の子が動きたびにふわふわと揺れる金色の髪の毛の先を凝視していたことに気付いたワイは、何か知らないが気恥ずかしくなって、慌てて答えた。

「ええよ、少し、待って」

ワイは小屋を飛びだした。妙に心が浮き立っていた。女の子の冷たく光る青い瞳を思い出すと、何かしら肉体の奥からぞくぞくと震えのような感覚が起こってくる。そういえば、名前を聞いていなかったと気づいたときには、肉屋の前に着いていた。

店は、住居と兼用で、ワイらは二階に寝室がある。生活のほぼすべては一階の店の中で過ごす。売り場の奥には、仕入れた家畜を処理する場所と、簡単なテーブルと椅子のある調理場があって、親方は大概ここで何かしら手を動かしているのが常だった。

店に客はいなかった。見ると、今朝がた処理して並べて置いた品物はすべて売り切れている。親方は、おそらく調理場のテーブルで、湯でもすすりながら一休みしているはずだった。

案の定、店の奥に入ると、ずずつと湯をすすする音が聞こえてきた。果たして、背中をまるめてテーブルに覆いかぶさるようにして木を割り抜いた湯呑をひげ面に押し当てている年老いたドワーフがワイの視界に入ってきた。

腸詰を持って行った先での出来事を親方に報告したワイは、もちろん、

キルデリクという万夫不当のドワーフの中のドワーフを、二人が探していることも話をした。そして、同じ名前の親方に腸詰のお礼かたがた会いたいと希望していることも。

「同じ名前というだけで、迷惑な話でんな」

ワイがそういうと、親方は金盞眼の奥の瞳をぎろりと向けて口を開いた。

「そりゃあ、ワシのことじゃ」

「またまた、そういうの、全然面白くないって」

「いや、本当じゃ。どれ、その母娘に会いに行くか」

呆気にと取られているワイを後目に、親方は店じまいをすすると、そそくさと外套を羽織って外に出ていく。慌てて後を追うワイを少し待ってから、親方は口を開いた。

「ワシに面倒ごとを押し付けてくるやつに、一人心当たりがあつてな。

古い友人じゃが、そいつ本人が来ていないとなると、あまりいい話ではないかもしれない」

親方の口が開いたのはそれっきりだった。親方は道中むつつりと黙り込み、ワイも自然と無口になった。

魔女の家が見えてきた。煙出しからいい匂いと一緒に、薄い煙が出ている。そういえば、先ほどは気にしなかったが、あの女の子は、何かしら不思議な方法で火を点けていた。そのことを親方に話すと、ぎろりとこちらをひとにらみして、魔女の家へ向かう足取りを心持ち早くした。

「こんにちは」

家に向かって呼びかけると、中から女の子が顔を出した。先ほどよりは幾分明るい表情で、女の子は親方を見ると、深々と頭を下げた。

「大変美味しいものをお恵み頂き、本当にありがとうございます。母も私も、もう路銀が底を尽き、父の故郷を訪ねるしか道が残されていませんでした。本当に、助かりました」

親方は、こくりと頷くと、ひげ面の奥で少し笑ったようだった。

「母君はどうだ？話はできそうか」

これまでワイが聞いたことのない、柔らかで慈愛に満ちた声で親方が女

の子に問いかける。

女の子は家の中に姿を消すと、数瞬後には先ほどの女性を伴って戸口に現れた。

「はじめまして、キルデリックさま。私は、バシンの妻フレダといいます」

「バシンは、あれは一緒じゃないのか」

親方の問いかけに、フレダは顔を左右に振って沈痛な表情をみせた。

「主人は、私たちを守るために……」

親方は深くうなずくと、瞳を閉じた。鎮魂の祈りを大地の母ケリリムへ捧げ、そのバシンという人の冥福を祈っているのがうかがい知れた。

瞳を開いて、親方はフレダを傍らで支えている女の子に視線を移した。

「ワシの記憶通りであれば、この娘がそうなのか？」

親方の問いに、フレダは頷く。

「難儀なことだ。もともと、ワシも、すっかりすべてをバシンから聞いていたわけではない。正直、魔法のことはいつでも眉唾もんだと思ってるし、この娘を見ていると、にわかには信じがたい」

「そうですね、どこまでバシンが話をしていたのかは知りませんが、改めてキルデリックさまに、私たち母娘の話を聞いていただくべきでしょうね」

ワイらは家の中へ招き入れられた。そのままフレダは倒れ伏すように寝床に横になり、その傍らには心配そうな顔をして女の子が立って母親を見下ろしている。無論、ワイらも椅子一つない家の中で立ち尽くしていた。

横になりながら、フレダは親方に顔を向けて口を開いた。

「バシンは言っていました。キルデリックと過ごした冒険の日々こそが、人生最良の日々だったと。傍らにキルデリックの居る間ほど、自分がぐっすり深く眠れたときはないと。私と出会う前の話ですから、妬けませんが仕方がありませんね」

くつくつとフレダはくぐもった笑い声をあげた。その表情は、先ほどまでの沈痛なものではなく、記憶の中の夫の姿に励まされるかのように、頬には幾分赤みがさし、瞳には快活そうな光が見える。

「どこからお話した方がよろしいでしょうか？」

「ワシが最後にバシンにあつたとき、あれは、面白い娘を妻に迎えると言って笑っていた。とんでもない娘だと。その舅には会うことは永久に叶わないが、その状況に感謝するとも言った。そして、その舅にまつわる秘密を教えてください」

フレダが口元にきゅつと力を入れるのが見えた。

「舅の名前は、ヴォルゲラ・ダークストーム。この世のありとあらゆる不浄と狂乱を極め、洗神の限りを尽くした男。悪魔の三人を育て上げ、三人にむごたらしく切り刻まれた男。その娘をめぐると。そして、その娘には恐ろしい呪いが秘められていることを聞いた」

フレダの表情は、先ほどの沈痛なものに戻っていた。瞳の奥に悲哀とも怒りとも知れない激しい感情が雷鳴のように光っているのが見えた。

「私は、バシンに求婚されたとき、すべてを打ち明けました。私の身にかげられた呪いについて、すべてをです。ですが、バシンはそれを笑い飛ばしました。父のことも、呪いのことも、私の愛を得る前には些事にすぎないと」

「格好つけの女たらしの、あいづらい物言いじゃの」

「そうですね、本当にそう。でもバシンは、最後の時まで、私と夫婦になったことを感謝してくれました」

フレダはそこまで話すと、大きく息を吸い込んでから、視線を親方に向けた。

「バシンは、最後に私に、娘を守るように頼みました。そして、そのためにストーンブリッジのキルデリックを頼れと。キルデリックは、自分の知りうる限り最良の戦士であり、雄々しい心を持った男だと。必ず、私と娘を守りきってくれるだろうと」

「買いかぶりなのか、本気なのか、いずれにせよ、迷惑な話じゃな」

親方は、フレダの視線を受けながら、静かにささやきかけるように言葉をつないだ。

「ヴォルゲラ・ダークストームは、自分の身に何かあったときのために、自分の子どもが産む子どもの体に自分の意志を宿らせることのできる秘術

を生み出したと、ワシは聞いた。そんな秘術があることをバシンは疑っていたが、真実だったということじゃな」

「そうです。ヴォルゲラの死後、執拗な追跡を受けて私は育ちました。私はヴォルゲラの弟子を名乗る男に匿われ、育てられました。その男が言うには、ヴォルゲラを殺した三人の中で、秘術に並々ならぬ興味を抱いていたのは、ザラダンだったということです。ザラダンは非常にプライドの高い男だったようですが、ヴォルゲラには卑屈なまでにへりくだり、隙あらばヴォルゲラから、秘術について情報を得ようとしていたと聞きました」

「ザラダン・マーカ」

親方は、眉間に深くしわを寄せて、その名をつぶやいた。ワイは初めて聞く名前だったが、その名前だけで、体の奥底からじわじわと不安が立ち上ってくるような感じがした。

「何度か、私とこの子が攫われそうになりました。その都度バシンが助けてくれた。ですが、あの日はそうではなかった。丸々と太った片目の男と、青白い顔をしたハーフェルフ。あの二人は、それまで私たちを付け回していた連中とは、まったく違っていました。そう、私たち全員を殺すことを目的に現れたとしか思えない、嵐のような襲撃でした。」

深く、フレダは息を吐いた。襲撃の様子を脳裏に思い起こしているのは明らかだった。

その様子を見ると、親方は天を仰いで呻いた。

「お前さんたちが何も悪くはないことは重々承知で、そして、むしろ被害者だということもわかつているが、その上であえて言わせてもらえば、格好つけの女たらしが、最後まで惚れた女にいい格好を見せようとしただけのこと。本人も本望だったろう。だが、残された者たちはどうなる？誰が残された者たちを守ってくれる？」

そこまで言って、親方は少し目じりを指でなぞって、何度も瞬きました。「……無責任なことだ。挙句に、その役割を古い友人の老いぼれに押し付けたというわけだ」

親方は絞り出すようにそういうと、フレダをじつと見遣った。

「そうなりますでしょうね……ですが、私たちには、もう、このアラランシア中で、頼れる人は、キルデリク様、あの人が今際の際に呼んだ、あなた様しかいないのです……」

「今際の際に呼んだ」という言葉がフレダの口から出た瞬間、親方の金壺眼の奥から涙があふれ出てきた。次から次へと流れ落ちる涙を、親方はぬぐうことをせず、そのままフレダを見つめていたが、やがて、大きく鼻を鳴らして口を開いた。

「……ワシに何をしろと？……バシンのワシに対する最期の願いを教えてくださいませんか？」

「先ほども言いましたが、私たちを、いえ、この娘を、アイギナを守っていたべきなのは、……あの人は言いました、キルデリクを頼れと。キルデリクにヤズトロモのところへ連れていってもらおうようにと」

「ヤズトロモ」の名前を聞いた親方は露骨に嫌な表情を見せた。ワイも、親方の口から何度かその名前を聞いていた。ダークウッドの森の南の縁の珍妙な塔でくらししている、肉の味のわからない、甘党の変わり者の魔法使いのことを。

ドワーフたちは魔法にあまりなじみがなく、魔法使いを信用していないが、ヤズトロモだけは別だった。ジリブラン以下、皆が信愛と畏敬の念をヤズトロモに抱いていた。だが親方だけは、ヤズトロモを信用していないかった。信用していないどころの話ではなく、かの魔法使いを憎んでいるような話題が多かった。親方はかたくなに、ヤズトロモは塔の中で怪しげな、世の中にとつて害悪しかもたらさないような邪な研究を行っている、固く信じているようだった。親方にどうしてそれほどヤズトロモを憎むのかと質問したことがあったが、肉を勝手に熟成されたとか、最上の羊肉を魔法で勝手にこんがり焼きあげられた挙句、砂糖を大量に振りかけて食われたとか、そもそも魔法使いという人種とは相性が合わないとか色々言っていたが、それほど明確な回答はなかった。

要は、親方はかつてヤズトロモと頻繁に会っていたことがあり、何かし

ら（魔法が関係しているとは限らない）の出来事があって、ヤズトロモを憎むようになったのだろう

「ワシは、あれが好きではない」

名前すら口にしたくないのか、親方は「あれ」とヤズトロモを呼んだ。

「だが、あれの仲間のしでかしたことを、ワシらが尻ぬぐいするのもおかしいと思う。あれに責任をとってもらうしかないだろうな」

ヤズトロモとダークストームは、「仲間」ではないだろうが、親方にとつては、魔法使いという大きな括りからそういうことになるようだった。親方はそういうと、しばし何事か考える風で視線を床に落としていたが、次の瞬間には目を見開いて顔をあげた。

「いいだろう、ワシがあれのところまでお前さんたちを送り届けよう……バシンとの友情とかけがえの無い思い出に誓って」

親方の言葉に、フレダは、目を閉じて小さく祈りの言葉を口にした。

「本当に、ありがとうございます」

横になったままのフレダの目じりに大きく涙が浮かんだかと思うと、痩せた頬を伝って落ちた。

次の瞬間、親方は振り返ると、いつもの胴間声でワイをどやしたてた。

「すぐ店に戻って、旅の準備だ、お前も行くんだ、いいな？」

思いがけない親方の命令に、ワイの心は沸き立った。ストーンブリッジでの、肉屋の仕事を手伝って過ごす代わり映えのしない毎日を、ワイは嫌いではなかった。だけれども、一度、ストーンブリッジとは異なる街や、世界を実際に見て見たいと、同じ年頃の少年なら誰でも抱くような、外の世界への漠然とした憧れはワイの中にも十分あった。ストーンブリッジを訪れる旅の冒険者たちから聞く冒険譚は、とても魅力的で心を躍らせるものがあった。

「や、やった！ワイも連れてくの、絶対やで！約束や！」

そう親方に叫んだワイは、そのまま、あばら家の外へ飛び出した。

店への道が、いつもと断然違って、何やら極彩色の光に包まれたトンネルの様に感じられた。

## ↓アイギナ その1↓

ポンペが何かを叫んで家を飛び出して行ってすぐ、母がキルデリクに声をかけた。

「……すいません、キルデリクさま」

キルデリクは手を伸ばして、その無骨な手を母の手のひらに重ねた。

「何も案ずることはない。ストーンブリッジからあれの塔まではフラットランドを突っ切るように離れているわけではないし、何度も通ったことのある道だ」

母は少し顔をあげてキルデリクを見た。

「私は、もう、一人で立って歩くのも難しい……私たちを襲ってきた連中が追ってきているとして、私を連れていては、皆が危険にさらされます……大変申しわけないのですが、私はいけません……どうか、この娘を、アイギナを、お守りください」

何とか声をつないだというようにそこまで言うと、母は力を失って敷かれている藁の中に沈み込んだ。

「お母さん？」

歩み寄ると、母は瞼を閉じて、少し苦し気に眉根をゆがませながら眠りに落ちていた。

「……母君のいうとおり、このままの状態では、あれの塔まで連れていくことはできません」

私に向けられたキルデリクの声に、顔をあげる。浅黒い日に焼けた顔。金盞眼の奥の瞳は、強くそれでいて優しい。

「お前さんだけでも、という話のようだが、どうする？母君の回復を待つていつしよに向かうか？それとも、すぐに発つか？……ワシは、すぐ発つべきだと思う。ここだとて、完全に安心な場所ではない。いつ、ザラダンの手下がお前さんたちを襲撃してくるか、わからない。ことは急いだ方がいいとワシは思う」

答えは決まっていた。父が、母と私を逃がしたとき、生きると、絶対に

お前だけは死ぬなと言った時から、私は、例えそれがどんなに苦難の伴うことであろうとも、生き抜かなくてはならなくなつたのだ。

「行くわ。アタシ、すぐここを出発したい」

私の言葉に、キルデリクは深くうなずいた。

「でも、本当に、あなたがいつしよに行つてくれるの？」

続けて発した私の言葉は、キルデリクの予想にはなかつたもののようにだつた。明らかに狼狽した瞳が、私を見つめた。

「何を言っている？」

「胸が痛いはず。そして、時々ひどい眩暈がしてらっしゃるでしょ？ひどく疲れていて、本当は、もう、ずっと横になつていたい。違う？」

キルデリクの金盞眼の奥の瞳が、これ以上はないというほど見開かれて私を見つめている。驚き、そして、怖れ。その瞳の色はやがて嫌悪に変化するだろう。誰でもそうだった。ことに、一家言ある大人はみんなそうだ。

私のことを、怖れ、やがて憎悪し、自分の視界の先から追い出そうとする。

「こいつは、驚いた。お前さんは、本当にバシンの娘なのか？」

だが、キルデリクという言葉も、私の想像とは違つていた。

「鷹が鷹を生んだ、いや、母親の血統か？それにしても、一目見ただけで、体調の具合をぴつたりと診たてるなんて、そんじよそこの医者でもできないだろう。それを、お前さんみたいな娘っこがやっちゃうんだ、これは、驚いた」

私が怖れの色だと見たものは、そうではなかつた。逆に、高揚した誇りの色だつた。「驚いた」と何度も繰り返すキルデリクの口調や表情は、明らかに興奮していて、嬉しそうだった。純粋に、旧友の娘の持つ能力に感嘆し、賛美しているかのように思えた。

「で、お前さんの診立てでは、どうだね？あとどれくらいもちそうかね？」不意に、キルデリクが、私に尋ねた。あまりに何気ない口調だったので、私は、また、面喰らつた。

「本当は、立っているのが、やつとははず。それだけ、心臓は弱っている。いつ、死んでもおかしくない」

私は、小さなころから、人の身体の弱つているところがわかつた。なぜかはわからない。ただ、わかるとしか言いようがなかつた。それを、母や父は、私に祖父の魂が寄生しているせいではないかと思ひ悩んでいたようだったが、本当に幼いころはいざ知らず、ここ数年は、逆に、この能力で糊口をしのぐことができたりしたので、自分でも得難い能力だと思つてうになつていた。もつとも、先ほどキルデリクの反応に対して身構えたように、他人との関係性を大きく損ないかねない能力であることも身に染みてわかつていたのだが。

「そうか、いつ死んでもおかしくないのか」

私の言葉を受けて、キルデリクは深く目を閉じた。

「じゃが、やつぱり、ワシは、お前さんを送っていくことにしよう。さつきも言ったように、バシンの友情とかけがえの無い思い出に誓つて、じゃ」

目を開くと、キルデリクは視線を私に向けて、ほほ笑んだ。

「どれ、ポンペが旅支度を終えたかどうか、見てくるかの。明日の朝には出発したい。一番鶏が鳴く頃、ここに来よう」

眠っている母に黙礼して、キルデリクは出ていった。

その背中が、果たして、かつて父が共に冒険の旅路を過ごしていた時の、「ジリブランに過ぎたるもの」と呼ばれていたころと同じものだっただろうか。

私には、到底そうだとは思えず、老いたドワーフの背中が消えた家の出入り口を暗澹とした気持ちで、ただ、見つめ続けた。

翌朝、一番鶏の鳴き声がするかしらないかの頃に、家の外で、私はキルデリクを待った。

まだ朝日は昇つておらず、周囲は薄暗いままで、ストーンブリッジは、深い朝霧に包まれている。

その霧の向こう側から、あのポンペという少年のけたたましい笑い声が聞こえてきて、私は、どことなくそれまでの暗澹とした気持ちが軽くなつていくのを感じた。

(あれも、いつしよに行くんだった)

どこか、意地悪な気持ちで、はち切れんばかりに血色のいい丸顔を思い出して、私は、思わず吹き出してしまった。私の足払いになすすべもなく倒れたときの、あつけにとられた間抜けな面。ナイフを突きつけられ、おびえ切っていたくせに、強がって見せたあの顔。そのどれもが滑稽で無様に見えた。その様子を思い出すと、私の中には、どこか昏い喜びのような感情が沸き起こった。

(せいぜい、がんばってついてくることね)

どうも、私は、ポンペが嫌いらしい。あの丸顔が、おびえ、泣きわめく姿が見たいという、底意地の悪い気持ちで、私の心は沸き立った。姿を現したキルデリクたちは、馬車に乗っていた。

一頭だての、古めかしい馬車の手綱を操りながら、キルデリクは、私を呼んだ。

「母君にお別れはしたかの？」

こくりとなずいて、私は、馬車の御車台に乗り込もうとした。

母には、昨夜、一人でヤズトロモの塔へ向かうことを説明して同意を得ていたが、キルデリクの体調については黙っていた。私が診る限り、母の体調も深刻だった。もう、ストーンブリッジの外に出ることは叶うまい。そんな母に、これ以上心配をかけたくはなかった。

「さて、お前さんは馬車には乗らん」

キルデリクは御者台の縁に手をかけた私に声をかけた。

「あんたは、ワイといっしよに歩いて行きまんねん」

荷台からひよいと顔をのぞかせたポンペは、見かけによらず身軽な風で、地面にすりと降り立った。

「どっついうこと？」

こちらに満面の笑みを向けるポンペを無視して、私は、御者台のキルデリクを見上げた。

「ここから、あれの塔に向かうには、ダークウッドの森の東側の街道を南へ向かっていくのが、一番安全だ」

そんなことは十分知っていた。だが、あいつらが、何もせずにそんな安全な道を行かせてくれるはずはなかった。ストーンブリッジへ入ったことも、あいつらはとくに把握しているだろう。そして、ジリブランを刺激せずに私たちを始末するため、私たちが出てくるのを、ストーンブリッジの外で待ち構えているに違いがなかった。

「その道を、ワシが馬車で行こう。敵には、母君の衰弱も、お前さんたちがバシンの古いなじみのワシに助けを求めることも、十分把握していることだろう。だから、ワシが囮になろうという訳だ」

「アタシと、このポンペだけで、ダークウッドの森を突っ切れてこと？」  
不安と不満の入り混じった私のあからさまな声に、キルデリクは少し笑った。

「お前さんが思う程、ポンペはおろかでも臆病でもないぞ。もつとも、そうは言え、まだまだ子どもであることは確かだ。そこで、森の中で暮らしている、ワシの古い知り合いの罫師に、あれの塔までお前さんたちと同行してもらえるように頼む手紙をポンペに持たせた。罫師の家はポンペが知っている」

私は、キルデリクの作戦を、頭の中で、少し吟味してみた。囮を使うことは、いい。昨日の診立てでも、キルデリクには、かつてのような戦う力はない。せめて囮にでもなろうという、老ドワーフの気持ちがあうらしい。例えそのことがキルデリクの寿命を縮めることになってもだ。だが、ポンペと二人でダークウッドの森へ入っていくことには、不安しかなかった。キルデリクは、ポンペを、おろかでも臆病でもないと言いが、あいつらのしつこさや冷酷さは、体験した私から言わせると、とてもまともな精神の持ち主では耐えられまい。現に、母は、精神的な不調から体調も崩して、衰弱しきってしまった。さらには、あいつらを出し抜いたり、時には戦う必要が生じることがあるだろう。

無言で考え込んでいる私を、キルデリクはじっと待った。ポンペも、大きな丸い瞳を、くるくると回すようにして、私をじっと見つめている。

……悩んでいるな？

含み笑いのような声で、心の中に、あの声がささやきかけてくる。

……力が欲しいのだろうか？こんな連中に頼らずとも、あいつらを、お前の父を殺し、お前たちを追い詰めた、あいつらを叩きのめす力を

(黙れ！)

私は、心の中で、その声を拒絶する。

……後悔するでないぞ、もっと早くに力を得ておけば、こんなことにはならなかったのに、と……

忍び笑いを漏らしながら、声は沈黙した。

次の瞬間、私の中に、ふつふつと怒りが、そして憎悪がみなぎってきた。こんな状態に私たちを追い込んだやつらを、絶対に許さない。そのためには、絶対に生き延びなくてはならない。だが、這いつくばって、埃と垢にまみれながら、屈辱的に生き延びるのはいやだ。私は、傲然と顔をあげ、正々堂々と生き延びてやりたい。どんな状況であっても、それを跳ね返す、勇気と知恵で、そして、誇りとで、私は生き延びてやるのだ。

「決めた」

キルデリクを見上げて、私は告げた。

「ダークウッドの森に入る。だから、匣を」

深々とキルデリクが頷き、ポンペへ声をかける。

「しつかりやれ、頼んだぞ」

大きな声でポンペがキルデリクに返事をして、その勢いのまま、私の方を向いた。

「というわけで、よろしくな！」

差し出された右手を、私は、握り返した。瞬間、ポンペの頬に赤みがさしたように見えた私は、ぞつとして、握った右手に渾身の力を込めた。

「あいたたた」

ポンペの悲鳴が、霧のまだ晴れない、早朝のストーンブリッジに響くの、私は少しばかり意地悪な気持ちで聞いた。

## 大魔導師アラゴン その1

この懐かしいぬくもりを背中に感じるのは、いつ以来だろうか。夢だとはわかっていた。だが、これは、悪い夢ではなかった。

幸せだったころの夢。そして、日々がすさまじい恐怖の中で過ぎていた頃の夢。

……あのお空の雲をとって欲しいの

「お嬢様」は、私の背中で、そう言っただけで空を指さした。

いつも、「お嬢様」を背負い、私は忙しく雑多な仕事をこなしていた。

師匠は恐ろしい人で、そして、最近は何より、おとうと弟子になった三人が怖かった。

今日の夢は、師匠も、怖いおとうと弟子たちも出てこないようだった。

大好きだった「お嬢様」と自分だけ。この時も私は、師匠にきつと何かを言いつけられているのだろうが、「お嬢様」と遊ぶことに傾注してもいいだろう。なにしろ、これは私の夢だ。

……お嬢様、雲をとってくるほど、私は魔法が得意ではありません

……あら、お父様の弟子なのに？

「お嬢様」は、何がおかしいのか、ころころと笑い声をあげた。好きだった声。優しく美しい声だ。

……「お嬢様」、すこしそのあたりを散歩しませんか？

返事はなかった。だが、了解を得たと思った私は、背中の少女を下ろすために、地面にしゃがみこんだ。

……さ、どうぞ

私の首に巻かれていた細い腕が解かれ、地面に少女が降り立つ気配がした。笑顔で振り返った私は、そこで身動きできずに固まってしまった。

そこに居たのは、「お嬢様」ではなかった。

何か、そこに立っていた。瘴気そのもののような、黒い影に見えたものは、徐々に、大きなマントにくるまれ、つば広の帽子を目深にかぶって

幾分下の方を向いて佇んでいる老人の姿を象った。

その姿に見覚えがある。いや、おそらくは自分が死んでもその姿を忘れることはないだろう。圧倒的な屈辱と恐怖を自分に与え、自分のすべてを蹂躪して作り替えた絶対的な存在。

……師匠

我知らず呼んだ声に、老人が応えるようにして帽子のつばを人差し指の先で押し上げる。

こちらを向いた老人の視線に、心が砕けそうな程恐怖を覚える。両の目がなかった。あるべき部分は、眼窩に黒々とした深淵が渦巻いている。面長で秀でた額を持ち、白いが豊かな髪と顎髭が、端正な面立ちを引き締められている。かつて見慣れた師匠であるヴォルゲラ・ダークストームの、秀でてはいるが禍々しい魔法使い然とした風貌の中心だったはずの瞳が、ない。

……久しいな、アラゴン

外観と異なり、師匠の声は、昔とまったく変わらぬ、妙なる声音だった。聞くものを魅了し、その心を捉えて放さない魔性の声。

……おぬしは、相変わらずじゃのう。こんな、ありもしない世界を夢に見る。そんなに、儂らと過ごした日々が懐かしいか？あんなに、おぬしを責め苛んだこの儂が？

師匠の像は、私の視界にある周囲の雰囲気とは異なって見えていた。ぼやけた風景の中で、一人だけ輪郭が明確だった。そして、その口ぶりから、彼自身が私の夢の中に入り込んでいることがわかった。今となっては懐かしい、師匠がよく使っていた夢の術だ。だが、師匠がこの世界から不本意な形で退場してから、当然なことだが、師匠が私の夢に踏み込んでくることが絶えてなくなっていた。

……して、おぬしの前に、わざわざ出向いてきてやった理由はわかっていような

真つ黒な渦巻が私を視線に捉える。ぞつとしながら、私は答える。

……鍵は、まだ持っています

師匠は当然と言わんばかりに右手で長い顎鬚をしごいた。

……よくやったと、いいたいところだが、おぬしは、儂を裏切っておる。鍵は持っていないでも使う気が無いというのでは困るな

私は黙った。物質界にもはや存在していなくとも、師匠が私の裏切りを気付いていない訳はなく、そのことを指摘されても、私に動揺はなかった。

……歳月は人を変える。おぬしも随分とふてぶてしくなったな

居直るように沈黙し続ける私に、師匠が鷹揚な声をかける。だが、肝心の視線が漆黒の渦巻のままなのが不気味だった。もともと人間離れしていたが、物質界を離れてからは、そもそも人間であることを止めてしまったようだった。

……門はいま、おぬしの近くにいます

思わず私は目を見張った。そんな私の様子を黒い渦巻が視認したのか、師匠が口の端を歪めた。

……おぬしの裏切りについては、不問にしよう。故に、おぬしに命じる。門の扉をあけるのじゃ。そうしなければ、わかっておるう？

……師匠、教えていただきたい。門が私の近くにいらぬことですが、それは、どういうことでしょうか

私は、おびえながらも、幾分強い口調で質問を師匠に投げかけた。夢の中だ。命までは奪われまいだろう、いや、奪われて困るほどの命など、もはや私は持っていないかった。

……言葉の意味通り。おぬしの、この、「大魔導師アラゴン」の看板を掲げた賤家のそばにいらぬということじゃ

師匠が口元に笑みを浮かべたまま私の質問に答えた。師匠は嘲笑していた。「大魔導師」の看板を棲み処の入り口に掲げる私の臆病さを、そして無為に日々を送る私の人生そのものを。

込み上げてくる屈辱感の中、私はさらに尋ねた。

……それは、「お嬢様」がここに来ておられるということですか

師匠はその質問に、呵々大笑する。笑いの発作が収まると、師匠は、こ



れ以上は無い猫なで声のような魅惑的な声で私に微笑みかけた。

……フレダはすでに門ではない。それはおぬしもよく知っておろう。今の門が生まれたのはまったくの偶然よ。それを知っていて、フレダがここに来ているかどうかを聞くのか？ つくづく、歳月の流れは恐ろしいものだな。かつてのおぬしなら、こんな度胸試しは、寿命を縮めるだけだと知っておったはずだがな

師匠がそこまで言って、私は得心した。門が、つまりは、師匠の血を継いだ者がダークウッドの森に入っているのだ。それはとりもおさず「お嬢様」の子どものはずだった。そのことがうれしかった。「お嬢様」のかなうはずのなかつたささやかな夢が、どういう経緯かは知らないが、一つかなったことを、私は知った。

……おぬしの思惑はどうであれ、門は鍵に引き寄せられたかのようじゃな。おぬしに命じていたことは覚えておろう？ 門が十三歳になるとき、鍵を用いて扉を開くのだと。この門の扉は、大きく広い。いかにおぬしが小細工をしようとも、儂が受肉することを妨げることは難しいのう

だが私は知っている。どれだけ門が大きく広くとも、扉はある。物質界へ向けて扉を開けるには、鍵が要る。鍵を生み出したのは師匠だ。

霊界や魔界などの異界について師匠は、おそらくはロガーンの生み出した人間という存在の中で、最も精通した人物だったろう。師匠は執念深く長年にわたって異界について詳細な調査を行い、手に入れた膨大な知識と繰り返し返された実践の結果、異界どうしのつながりや、異界への変位の方法などを発見したのだ。

すでに師匠は、物質界にはいない。あの日、おとうと弟子たちの挑戦を受けて、切り刻まれてしまった師匠は、そのまま、死者の世界ではなく、物質界ではない異界へ変位してしまった。師匠は、そのまま門の扉を開いて、タイタンから消えてしまったのだ。

門の扉の開閉は非常に困難を伴うものの、師匠によれば、人間にとつて異界と物質界側をつなぐことは、異界と異界を移動していくよりも簡単だという。物質界はもつとも安定した世界であり、異界どうしの結節点で

あるのが理由だと師匠は教えてくれた。異界から物質界への移動は、目の粗い箆で砂をふるいにかけるようなもので、そんなに困難なことではないそうだ。混沌魔法などが代表だが、アクシデント的に異界の門を開いてしまう事例が多数存在しているように、何かの拍子で門が開いてしまつて異界と物質界が結節してしまふことは多々あった（その都度、我々は、おおつと！と叫ぶのだが）。

そして、物質界に受肉するということは、異界を含めたこの世界の中で圧倒的な安定感を持つて存在することができるようになるということらしかった。だが、その反面、異界の境界を超えることは、その安定性が仇となった。それぞれの異界の世界を形作る法則性において、物質界の持つ強固な安定性は異物として遮断されてしまふらしいのだ。箆の目に引掛かる少し大きい小石のイメージだろうか。故に、神秘の薬草であるカネルウオートの力や、師匠のように幽体になって異界へ変位することが一般的に行われるのだ。まあ、一般的にと言つても、そもそも事例がほとんどないのだが、数少ない事例の中でも、受肉したまま、異界へ入る、もしくは逆を行うためには、門と呼ばれる存在が、例えればかなり粗い箆が、必要とされたのだ。

一方、異界から異界への移動は、異界と物質界の間とは異なる困難があるという。例えば、比較的我々が知識を持つ、奈落の八魔界は、魔界どうしに物理的な橋を架けており、それによつて往来が可能となっているが、橋に抛らない境界を越えていく方法は、それぞれの異界間にある共通の法則性によるのか、移転先の異界の法則に合わせた存在の変換そのものを伴うものか、大きく異なる。それらの方法は無数にある代わり複雑であり、橋を用いずに魔界を旅する者は、高位の魔界の住人や神などを除けばほとんど居ないという。

師匠は、召霊術を修めた際に、異界との交感や異界そのものと接触する場合に用いられる触媒について多くの知見を得た。触媒の多くは人間の頭部や心臓に関わるもの、人間でなければ、その目的に応じた生き物の身体の一部など、ある一定の部位が用いられ、それ自体に何らかの生命力の残

滓や、生命力そのものが込められていることが多い。

異界を自在に行き来する存在の代表格は、言うまでもなく、神だ。神は自らを変位させることなく、あるがままにあらゆる異界を行き来できる。

神になぜそれができるのかはわからない。師匠は、神の存在についても執念に近い関心を持っていて、様々な知見を持っていたが、結局このことについてはわからず仕舞いだったようだ。だが、根本的な原理はわからぬものの、神の持つ特徴を活用することを、師匠は考えた。よく知られているように、人間の男と女は、ロガーンの一部を脳と心臓に埋め込まれることで創造された。そう、我々人間には、何億分の一であっても、必ず神の血が流れているのだ。師匠は、この人間に埋め込まれた神のかけらを収集し、純度の高いかたちで使用に耐えうるように、きわめてロガーンそのものに近いかたちに精製するということを考えたのだ。

今でも悪夢に見るような残酷な行為を、師匠は繰り返した。生きたまま（なぜ生きたままだったのかは、怖くて聞けなかった）体を圧搾された人間の搾り滓をホムンクルスたちに指示して廃棄するのが私の仕事だった。搾り取られた方の、かつては人間を形作っていた何かを集めたものについては、師匠が自ら差配して、様々な悪夢のような実験を繰り返していた。

結果、鍵が生み出された。純度の高い、人間の中のロガーンを一つにまとめて固めたもの。そして、その鍵を用いるための門は、すでに師匠によって入念に準備されていた。

師匠は、ロガーンのかげらと、特定の血を交わらせることで、その血の持ち主による異界への変位が可能になるということに気付いていた。変位を遂げるための物質界から異界への門は、その肉と骨と血によって顕現し、扉が開くのだ。もちろん、門となることは、その肉と骨と血を異界の境界とすることでもあり、多大な影響を精神と身体に及ぼすことになる。師匠がそんな危険を自らに課すはずもなく、ほかならぬ自分の娘を変位の際の門とすることを計画していたのだ。自分と同じ性質を持つ娘の血とロガーンの鍵を交わらせて現れる門を用いて変位を遂げる。それが師匠の異界と物質界の境界を超える計画だったのだ。

さらに師匠は、異界を渡ることもそうだが、幽体からの受肉による物質界への復活にこだわっていた。おとうと弟子たちによって、自己の肉体の滅ぶ危険性が間近に迫っているということを、おそらくは感づいていたのだろう。だが師匠は、門となって心身ともに衰弱するであろう娘に受肉することを望んではいなかった。娘の産む、若く健康な子に自分を受肉させることを計画したのだ。鍵で娘が産んだ子どもの精神を葬り去って身体を乗っ取るのだ。鍵の中のロガーンをその子の中に埋め込み、新たに異界を渡る存在として再生させる。そして、その肉と骨と血を憑代とした師匠が物質界に再臨するのだ。

師匠本人は絶対に認めないだろうが、どう考えても、師匠はあの三人を恐れていたのだろう。神を除くあらゆる存在を下に見て（実際は神すらも度々下に見ていたが）、自らをタイタンに冠絶する圧倒的な存在として自負していた師匠が、自らの肉体的な死を想定してこれほどまでに念の入った準備をしていたことが、そのすべてを物語っていると思う。師匠は、いずれ三人が自分に挑むことと、その挑戦を退けることができない可能性が十分にあることについて考えていたのだ。

だが、今にして思えば、その用意周到さが、いささか滑稽でもある。そこまでして逃げなくてはならない程、あの三人を恐れていたのだろうか。それとも、異界研究の第一人者としての研究を、自らの行動によって証明せんとする研究者としての情熱故だったのだろうか。いずれにせよ、幽体になって異界へ変位し、さらに物質界に帰還しようとしている師匠は、何を指すのだろうか。ただ一つ言えることは、物質界へ再臨した師匠は、老齢故の精神的な弛緩や、肉体的な衰えによる集中力の若干の欠如という弱点が克服された、完全な状態となっているのだ。

……それだけは避けなくてはならない

私は「お嬢様」の養育を長年任されていたが、何も知らなかった。ある日突然師匠から預けられた、見目麗しい幼い女の子に心底夢中になり、誠心誠意その子につくした。それだけに、師匠から真相を聞いた夜、私は「お嬢様」の来し方と行く末を思っ泣いた。屈辱と恐怖で、師匠に強固

に縛り付けられていた私だったが、それでも、「お嬢様」を連れて師匠のもとから逃げ出そうと、何度も夢想した。結果、そんな逃避行は、当の師匠がタイタンから去った日を待たねばならなかった。

師匠が「おとうと弟子」たちの挑戦に屈したあの日。惨たらしき切り刻まれた師匠を前にして、私は「お嬢様」の中の門を、鍵を使って開いた。師匠から受けていた命令を実行したのだ。

鍵を「お嬢様」の太ももに突き立てた。鍵は鋭い刃物のような形状に作られており、幼い「お嬢様」は泣き叫んだ。「お嬢様」を抱きしめ、血を溢れさせる傷口を自分の手のひらで抑えながら、私も泣いた。そんな我々の狂乱を後目に、幽体となった師匠は、「お嬢様」の内に開いた、師匠のためだけの異界への門を通って変位した。門は、魔法の力をあまり持たない私にも明確に視認できた。それは、何やら奈落の底へ通じるような禍々しくうごめく空間としてお嬢様の中に現れ、師匠の幽体は、そこに吸い込まれるようにして消えた。そして、私は師匠の再臨に備えて、「お嬢様」との逃避行を開始したのだ。

師匠は、こうして、自らが閉じこもり、おとうと弟子をはじめとする脅威から身を守ることのできる異界で力を蓄えながら門の誕生と成長を待つことになった。

「お嬢様」は、異界への門をその内に開くことで、最初で最後の門としての役割を終えた。「お嬢様」の次なる役割は、師匠の血を用いた師匠の受肉のための器を生むことだった。だが、「お嬢様」は門としての役割を果たした際に、大きく健康を損ねていたし、年端のいかない少女であることもあり、その回復と成長を待つ必要があった。門の誕生のため、師匠はあらかじめ、「お嬢様」のつがいとなる者を手配していた。私は、「お嬢様」の回復がなされ、十分に成長したと判断した段階で、師匠の手配した先へ「お嬢様」を連れていく必要があった。

だが私は師匠を裏切った。門として体と精神に大きな痛手を受けた「お嬢様」だったが、門である機能を喪失したことで、物質界と師匠を結ぶ憑代としての役割も失われて

いたことは幸いだった。

おとうと弟子たちの追跡も恐ろしかったが、何より師匠の干渉が怖かった。「お嬢様」には幸せになって欲しかった。「お嬢様」のささやかな夢の数々が、すべて叶うことを願ってやまなかった。

私は長らく、「お嬢様」が独り立ちできるようにしたら、自らの命を絶とうと考えていた。鍵はどこかの山の中にでも埋めようと思っていた。

だが、独り立ちの日、「お嬢様」は、私に命じられたのだ。「また、あいましよう」と。故に、私は生きている。そして、鍵を隠し続ける場所と定めたダークウッドの森で、ひっそりと生きていたのだ。だが、その日々は、たった今終わりを告げていた。

……しかし、「大魔導師アラゴン」、か。実におぬしらしい。臆病で執拗、愚かで粘着質なおぬしを端的に表現しておるの

師匠がこらえきれないという風に笑い声をあげる。弟子として近侍していた頃、私の顔を見れば、嘲弄し面罵し続けた師匠にしては、大人しめの皮肉なのが意外だった。だが、次の言葉に、私の心はかつてのように、言い知れぬ不安で縮み上がっていた。

……儂の手は、だいぶ伸びるようになった  
師匠が漆黒の渦巻と化している視線を私に向ける。

……門が生まれてから、徐々にではあるが、儂は門を介して様々に物質界に干渉することができるようになってきている。門は、儂の言葉によく耳を傾けてくれるのじゃ。いい孫じゃろ？無論、フレダについても、捕捉できた。わかるな？フレダを大事と思うのなら、門の扉を開くのだ

端正な口元が歪む。どれだけ自分より劣っている者が相手であろうと、師匠は他者を必要以上に脅迫し、思うがままに操ることをやめない。それ自体が、愉快でたまらないからだ。

……儂が受肉し、物質界に復活する。そのために、おぬしのすべきことは、門を開くこと。それも、一両日中に。そうでなくては、あの乱杭歯の顔色の悪い不肖の弟子の手下にしてやられるぞ

そこまで言って、化け物じみた師匠の姿が消えた。それと同時に私は覚

醒していた。見渡すと、寝室にいた。「大魔導師アラゴン」の看板を掲げた、藁ぶきで石造りの、粗末な建物の一角。臆病な自分がこの森で暮らしていくために必要な看板。自分には魔法の才能はなかった。だがそれでも、現在最も危険だと目されている魔法使いたち、巷間「悪魔の三人」と呼ばれている彼らと長い時間寝食を共にしたことがあるのは、アランシア広しと言えども私だけだろう。

その事実だけでも、いわれなき暴力に対する抑止力になった。悪魔の三人の「あに弟子」という経歴を、積極的に吹聴したことはなかったが、いざというとき、その事実は強力な武器になった。実力を伴わない無力な自分さえ、多くの者たちが畏怖と恐怖の視線を向けた。

私自身は、嫌悪し続けた連中の悪名の影にすがって生き続ける自分を激しく憎悪しているが、「お嬢様」を守り、育て上げるために、何度も彼らの悪名を利用した。師匠の命令だけなら、そんな屈辱は耐えられなかった。

無垢で愛らしい「お嬢様」。その存在は、ただただ、この世への未練、邪な野心をまつとうさせたい狂気の老魔法使いが秘術を施した憑代でしかないという事実。その事実にささやかながらも立ち向かうことを決意した時から、私はあらゆることに耐えられるようになったのだ。

「お嬢様」の成長と、やがて訪れた自立の瞬間に至るまで、私はただただ幸福だったと思う。「お嬢様」のためなら、どんな屈辱や恐怖にも耐えられたし、自分が「悪魔の三人」の「あに弟子」だったということを思い出させるような、おぞましい所業に手を染めることさえ敢えて行うことができた。

あの日々のあらゆる情景が、明滅するようにして脳裏に明瞭に思い起こされる。

いてもたってもいられなくなっていた。「お嬢様」を守らなくては。まだ、自分が「お嬢様」に対して、そして、「お嬢様」の子どもに対して、何かできることがあるのではないかという、祈りに似た渴望。

寝床から身を起ししながら、私は不安と焦燥と、そして、あの逃避行の

日々を感じていた、静かな満ち足りた気持ちの胸の内に沸いてくるのを感じていた。

それは、師匠への恐怖を大きく超えて、私の心を奮い立たせた。

♪ポンペ その2♪

「わわ！そっちへ近づいたら、あかんて」

ワイが、小声でアイギナに注意を促すと、振り返ったアイギナは、不満げに下唇を突き出したが、何も言わずにワイバーンの巣に近づくことを止めてくれた。

ダークウッドの森に入ってから、この調子で何度もアイギナに声をかけた。ストーンブリッジから目と鼻の先の場所であっても、凶悪な盗賊の一味や、とんでもなく凶暴なモンスター、そしてあやしげな魔法使いがたくさん住み着いているのが、この森だ。そうしたものは、隠れ潜んでいるわけではない。自分たちの姿を顕在化させることが、自らの欲求を満たすために必要と思えば、堂々と姿を現し、そして、さも意味ありげなものを置くことで、森へ入る人々を罠に誘い込もうとしているのだ。

そのことも、道すがら何度もアイギナに話をして聞かせたはずなのに、そもそもワイのいうことを聞く気がないのか、怖いもの見たさの性分が人並外れて強いのか、とにかく自ら進んで危地へ飛び込んでいくことが続いて、ワイは、ほとほと疲れてしまっていた。

……まだ、ナマズ川も見えてきてないのに、これはつらいで

先の道のりの長さと同比例していく不安の大きさに、ワイは気を失いそうな気分になっていた。もっとも、本当に気を失ったことなど、記憶の限りはなかったのだ。どんな状態なのか、正直わからなかったけれど。

二人で森へ分け入った時の、得も言われぬ高揚感はずっと消え失せていた。ワイは、アイギナの姿を視界にとらえたり、その幾分高圧的な声が聴こえてくると、心が弾むことに気付いていた。なので、二人だけで罠師のクインのところへ行くということに、正直不安よりも喜びの方が大きか

った。いいところを彼女に見せられそうだと、単純に思っていたのだ。だが、その希望は無残にも打ち砕かれた。自由奔放なアイギナの行動は、常に必要以上の緊張をワイに強いた。慎重に進んでいても何が起きるかかわからない危険な場所なのに、彼女の行動は、あまりに無防備で無頓着に過ぎた。

少しでも道を外れると、ぎっしりと立て込んだ幹の群れに前途を阻まれ、何やら得体の知れない生い茂った下草や藪に足をからめとられる。ワイは慎重にアイギナを先導し、何か異変はないか周囲へ注意を払ってから足を進めた。地形は少しずつ左右に起伏が見られる谷地形に変わっていた。ナマズ川が近くなってきたのだ。そのことに気付いたワイは少し安心した。川を渡った先に、畏師の小屋があるのだ。

「あれ？」

不意にアイギナが立ち止まって声をあげる。またか、と内心うんざりしながらワイが振り返ると、アイギナがさした指の先が視界に入る。

ワイは込み合った木立に隠れるようにして見える岩場の中に、一際大きな岩が屹立しているのを見た。その岩のさらに上に剣の柄が見えた。刀身は岩に突き刺さっている。

「ああ、その剣か」

ワイは、アイギナの目ざとさに感心しながら、ため息交じりに岩の中に突き刺さっている剣の由来について説明しようと口を開きかけた。だが、次の瞬間、慌てて身を乗り出して制止の声を発していた。

「あかんって！」

アイギナは軽やかなステップで道を外れて木立の中の岩に近づいていく。そのまま、平地を行くかの如く岩場の大きな凹凸を乗り越えて、剣の突き刺さった岩の前に立っていた。

「この剣って、何かいわくがあるんでしょ？」

「いわくじゃなくて、伝説でんな」

「へえ、どんな？」

珍しくアイギナがこちらの言葉に興味を示し、岩の前でワイを見てい

る。

ワイはアイギナの立っている場所へ行こうと足場の悪い岩場を慎重に近づいていく。こんな場所をあっという間にわたっていったアイギナの身体能力の高さに驚きつつ、意味のない寄り道を繰り返すことへの怒りが、ワイの中にふつふつと煮えたぎっていた。

「ねえ、早く教えてよ」

額から滝のように流れ落ちる汗を手の甲でぬぐいながら、ワイは、肩で息をする。アイギナは、前方で両手を腰の後ろで組んで歩くでもなくたらずむでもなくふらふらとしている。

「教えてやったら、そこから戻ってくるか？」

アイギナは、こくりとうなずく。

「なら、教えてやるわ。ワイ、そっちへはよういかれん。しんどすぎるわい」

ころころとアイギナが笑う。ワイが苦しそうにしていたり、困り果てているのを見ると、アイギナはよく笑った。

「昔、といってもどれくらい昔のことかは知らんけど。というか、そもそもこの話自体も、ワイ、うる覚えなんだけど。とにかく、大昔に、ドワーフがエルフの王子のために鍛えたという業物らしいで。んで、どういうことでそうなったんかは知らんけど、ある悪魔が持ってたのを、高德の聖騎士様が悪魔を退治して手に入れられたんやって。それがえらい苦労だったのか、二度と悪魔や悪人の手に渡らんようになって、神様の力を借りて、その岩に剣を突き立てたんよ。それ以来、この剣は、悪魔や悪人は、引き抜くはおろか、触るだけで神の罰を受けて傷つくいいまんねん」

「実際に、これを引き抜こうとした人はいるの？」

「知らん。ここにまだあるってことは、おらんかったのか、これまで悪人だけが挑戦してきたのか、よう知らんがな」

ワイの説明に納得したのかどうかは知らないが、アイギナは約束通り、こちらへ足を踏み出したように見えた。アイギナと視線があった。いやな予感がした。その青い瞳には、あきらかにワイに対する嘲弄の感情が浮か

んでいた。

不意にアイギナが剣の柄に手を伸ばした。剣を岩から抜こうとしたようだった。

が、そのままアイギナは、まるで雷にでも撃たれたかのように、一瞬全身を硬直するや否や、仰向けに岩場に倒れた。

声にならない声をあげて、ワイは大慌てて、足場の悪い岩場を懸命にアイギナ目掛けて進んだ。

アイギナは剣の突き刺さった岩の傍らに仰向けに倒れていた。汗だくで近づいたワイは、アイギナを慌てて抱き起こして、その口元に手をかざした。呼吸があるのを感じたワイは、ほっとして、額の汗をぬぐった。

次の瞬間、気を失ってぐったりとしているアイギナを抱えながら、この後の行程を考えて、ワイの心は暗くなった。罌師の家は、ナマズ川を越えたところにある。川を越える算段はつけてあるが、アイギナを抱えていくのは、自分の体力的にも不安のある距離だった。ましてやこの森には、どんな危険が潜んでいるのか、危機が起きてみないとわからないところがある。近所の悪童たちが大人に叱られるときに「闇エルフに連れていかれっちまうぞ」と、よく言われるように、「闇エルフ」が潜むのも、この森だ。

だが、進むしかない。ワイは覚悟を決めると、持ってきたロープを使って、アイギナの身体をワイの背中に縛り付けた。思ったよりも、というか、見た目通りというか、アイギナは軽かった。同じ年頃のストーンブリッジの子どもたちは、肥満児もいたし、そうでなくても内側から皮膚を押し上げていような、年齢相応の健康的な肉付きの子どもが多かった。

不意に、アイギナがかわいそうになった。聞いた限りでは、彼女のなかには、彼女のよくない祖父が巣くっているのだという。そして、彼女自身には一切非がないにも関わらず、そのために理不尽な逃避行を強いられている。父親を奪われ、母親は衰弱し、自分一人で、見ず知らずの危険な土地を旅する必要に迫られている。こんなにぼろぼろになって。

痩せて、薄汚れたアイギナは、そうした重く辛い不幸を細い両肩にしよ

いこんでいるのだ。その割に、ワイの背中の子は軽すぎた。

「もっと、重くてええんやで」

ワイは岩場を慎重に歩きながら、背中の子に声をかけた。いらえないが、アイギナの温もりが心地よくて、ワイは顔をあげて前を見た。力がみなぎってくる気がした。

と、同時に、この状態でどうにか行ける安全な場所に思い至っていた。

## アイギナ その2

目を開くやいなや、膨らんだような丸い大きな目と視線が合った。叫び出しそうになった私の鼻先に生臭い吐き気を催す臭気が漂ってきた。見たことのない生き物が、私のかたわらに居た。

乾いた土の上に寝かされていたらしい上半身を起こすと、私は目の前の生き物を油断なく観察する。

さつき視線が合ったどんよりとした大きな丸い目は、まばたきひとつせずに、私の方を見ているのか見えていないのか、とにかく顔の横側についているので、いまいち視線の先がわからない。顔は、明らかに魚のそれだった。頭の下、人言えば肩のある辺りにご丁寧にも鰓がついている。衣類はまとっていない。その代わりという訳ではないだろうが、体中が鱗に覆われている。両手と両足があり、二本足で立っている。指のある手に三つ又の武器を手にしてる。

岩に刺さった剣を引き抜こうとしたところまでは覚えていた。体中に衝撃が走り、痺れ、気を失った。ということ、気を失った私はこの魚人間に捕らえられたのだろうか。ポンペは？私を置いて逃げた？それとも。

三つ又の錆びの浮いた刺突部を見て、私はそこにポンペの血痕が付いているような気になり、気分が悪くなった。あの間抜けな少年が、気を失った私を守るために命を失ったのでなければいいと思った。もし、そうなっていたとしても、気にする必要はない、死んだヤツが悪いと、いつもの私なら思っただろうが、ポンペとの道行きは最初考えていたよりも悪くなか

つたのだ。久々に、執拗な追手の気配や、精神的にも肉体的にも限界だった母を氣遣うこともなく、自分の好き勝手に行動し、わがままを言えた。そして何より、いつも困惑した表情で目をくるくる回しているポンペを見るのが愉快で楽しかった。

さらに私を鬱屈させる現実があった。岩に突き刺さった剣の柄を握った瞬間に体を貫いた衝撃だ。明らかに、私に反応し、私を自分のそばから退けようとする明確な意志を剣から感じた。ポンペの言うことが本当なのだとしたら、私は神の罰を受けたのだ。

……人をそれなりに殺したけど、私も生き延びるためだった。

その考えはごまかしでしかなかった。自分のこれまでの行動など、ほとんど善行にしか見えないような、もっと巨大な、ありとあらゆる悪を凝縮した、悪そのものの精神が、私の心の奥に巣くっている。おそらく神の罰は、私の奥底のあれに反応したのだ。あれが存在し続ける限り、私は自分の行動の如何を問わず、悪にしかなりえないのだ。

自分のために命を落としたかもしれないポンペを思った。死ぬ瞬間、私を恨んだらうか。憎んだらうか。ポンペだけではない。キルデリクだって、生きて帰るあてのない危険極まりない罠を買って出た。そして、私自身が手にかけて人たちは、私をどう思ったらう。私がこのまま生き続けるということは、そうした怨嗟をうず高く積み上げていくだけなのではないか。だがそれでも、生き抜くことに決めたのだ。父と母に誓ったのだ。

暗澹たる気持ちの中で、私は目の前の魚人間の拳動を抜け目なく見続けた。挙動というほどの動きはない。時折臉の無いどろりとした眼球がくるりと回る。口は半開き。鰓が時折引き攣るよううごめく。三つ又槍を持った手はピクリとも動かないし、歩きまわるといふこともない。静かに私の方に体を向けて立っているだけだ。私のベルトにナイフが差したままになっっている。まずは目の前の生き物を無力化し、この場所を出る。ポンペはいないが、とにかく南へ向かって進めばいいはずだ。

魚人間に視線を向けながら、ベルトのナイフの柄に手を伸ばした。その

瞬間だった。あの、幾分甲高い間の抜けた笑いが聞こえてきた。

「わはは、それや、そのイノシシの肉が、また、最高でまんねん」

呆氣にとられた私の目の前に、ポンペと、小山のように大柄な男が、大口を開いた間抜け面を引っ提げて現れた。

「お、目が覚めたか？」

半身を起こしている私に気付いたポンペが声をかけてくると、今までの暗鬱な気持ち、強い怒りに変わる。目の前の間抜け面に、さっきの後悔や悲しみをぶつけてやりたい衝動にかられる。

そんな私の気持ちを勿論ポンペが知るはずはない。満面の笑みで、私に近づいてくる。あと一歩の間合いに入った瞬間、私は跳ね起きて、ポンペの横つ面を張り飛ばした。

「こんな化け物のいるところにアタシを置きっぱなしにするなんてッ」張り飛ばされた左頬を抑えたポンペは、突然の私の暴力に衝撃を受けたらしく、目を白黒させて立ち尽くしている。「化け物」と言われた魚人間が、ポンペのかたわらに寄り添うように立って、人で言えば首にあたる部分をかき上げて、私の方にどろりとした視線を這わせてくる。

「おいおいおいおい！」

怒声が聞こえ、影がゆらりと私の上に覆いかぶさったと感じた瞬間、胸倉が掴まれ、そのまま持ち上げられた。例の小山のような大男だった。私を片手一本で持ち上げた浅黒い肌の扁平な顔が憤怒にゆがんでいた。首と胸が苦しかった。

「誤解！誤解なんやって、だから、クイン、アイギナを降ろしたって」ポンペが慌てて大男に縋りつくようにして私を下ろすように頼んだ。その頬には赤い痕が残っている。渾身の力で引っ叩いたのだ。ざまあみるといふ気持ちで、私のために必要のない弁明を大男にする横顔を見ながら、叩いた私の右の手のひらが、なんだかとても痛んだ。

「アイギナは、怖かったんよ。目が覚めて、こいつがじっと立ってたら、ワイでも怖いで」

「でも、お前を張り飛ばしたのはやり過ぎだ」

大男の暗い灰色の瞳が私を値踏みするように動く。やり過ぎではないだろう。私の感じた悲しみに対して、それほど行き過ぎた行為とは思えない。そうだ、ポンペが死んだのではないかと思つた瞬間の、言いようのない激しい心の動きの代償として。

「まあ、そういわんと。いいところあるんやで、アイギナには。ええと、そうやった、いいと、いいと……」

「……ないのか？」

永遠に続きそうな二人のくだらないやり取りを聞きながら、私は熱を帯びたように痛む右手のひらを握りしめた。

「状況を説明して、ポンペ」

尋ねた私の顔をぼんやりと見返したポンペの表情に、焦燥感をベースにしたイライラが私の中に募る。

「おまえ、まずは、ポンペに謝っとけ」

大男がずいっと身を私の方に乗り出した。ポンペがそれを抑えつつ、私に向かつて言う。

「ワイ、知り合いのフィッシュマンの棲み処がそんなに遠くないことを思い出して、倒れたアイギナを運んだんよ。で、ワイ一人では、もうどうにもならんから、クインを呼んで来たところだまんねん」

「こいつがキルデリクの言つた罊師？」

魚人間が知り合いだというポンペの物言いに眩暈を感じながら、ヤズトロモの塔まで同伴してくれるというキルデリクの知り合いの罊師を改めて観察する。

とにかく大男だった。私の出会つたことのある人間では、最大の部類だ。剥き出しの浅黒い肌の上半身は、はち切れんばかりに筋肉が発達し、汗でもかいているのか、てらてらと濡れたように光っている。それとは対照的に、小ぶりで整った顔が太い首の上に乗っかっていて、額の下の落ちくぼんだ眼窩の暗い瞳は、さつきから私を油断なく観察し続けている。

「そうだな。ウチの店にいい肉を入れてくれる。でも、本業は」

「アームレスラーさ！」

グイト、私の目の前にびくびくとうごめく上腕二頭筋を突き付けながら、クインは私にはじめて笑みを見せた。後ろで結わえた総髪が、小動物のしつぽの様に揺れる。こんな森の中で生活して、本業がアームレスラーということの異様さ、というか、アームレスラーで生計を立てているというのは、どういう種類の存在なのかと、私のクインを見る目は自然険しくなつた。

「きみは、アームレスリングをやつたことや見たことあるかい？」

私のポンペへの謂われない暴力に怒つていたのだから、悪い人間ではなさそうだが、アームレスリングの話になつた途端に、「おまえ」から「きみ」へ私の呼び方が変わり、それと同時に、扁平な顔に、浮かれた半笑いの表情が浮かんでいるのを、私は非常に興味悪く感じた。さらに質問に対して、「ない」と答えたとなん、早口でアームレスリングの歴史、その魅力、そして勝利するためのコツや、その観賞ポイントまで一気にまくしたてた。

「どうだい？アームレスリング、いいだろ？」

あいまいに頷く私にクインは満足したのか、「気に入った！」と私の頭の上に大きな手のひらを乗せて軽く叩いた。

「アームレスリング好きに悪いヤツはいないからね！きみもきつと、いい子だ！」

このままクインの相手をしていると気が変になりそうだと、ポンペに視線を向けると、そこでは、謎のダンスが始まつていた。ポンペは一心不乱に両手を鍵型にしたり、延ばしたりを繰り返して、腰を振ったり飛び上がったりしている。何が起きているのかと見ると、どうも、謎のダンスは魚人間へ向けてなされているようだ。ポンペが汗を飛び散らせながら踊り狂うのを、どんよりとした丸い目で見ながら、魚人間は右側に傾けている頭部を正面に戻すと、大きく一度頷くように前後に動かした。そして不意に踵を返すと、ゆらゆらと立ち去っていく。

「おお、ありがとーでんな」

「……今の、何？」



去つていく魚人間の背中に大きく手を振って感謝の言葉を述べるポンペに声をかける。

「言葉がわからなくても、身体の動きで意思疎通ができませんね」

振り返ったポンペが得意げに口の端を歪めてみせる。誰でもそうだろうが、理解の範疇を超えるものを見せられると、混乱するか圧倒されるか、いずれにせよ、無口になるだろう。私もそうだった。

「今のは、アイギナの面倒を見てくれて、ありがとーって気持ちを伝えたんよ」

「フィッシュマンは、基本的に自分たち以外には攻撃的なんだが、ポンペとは意思疎通できるというか、仲がいいんだ」

クインが腕を組んで頷きながら私にそう説明する。

「此処をもう少し先に行くと、滝があつて、その裏にフィッシュマンたちの棲み処がありまんねん。ワイ、たまに親方から言われて獣脂を持っていくねんけど、フィッシュマンとは親方の方が仲いいでんな。なんでも、昔ナマズ川で吸血ウナギに襲われとつたフィッシュマンの子どもを助けたとかなんとか言うもつたで。もつとも、フィッシュマンと会話ができるのは、ワイだけでんな」

あれを「会話」と言い切るポンペを胡散臭そうに見遣っていた私に、ポンペが視線を合わせてきた。大きな丸い目を一度瞬かせてから、息を吐き出すようにしてポンペは言った。

「すまんかったな、ひとりにしてもうて」

その瞬間、不思議なことに、あれほど痛かった私の右手の熱を帯びた痛みが消えていた。不意に、気付いた。ひよつとしたら、こいつは、底抜けに私のことが好きなんじゃなかるうか、と。そして、この世の中で、つい先日出会ったばかりの、この少年が、私にとって唯一何の気兼ねもなしに我儘が言える存在なのではないだろうか、と。もちろん、別に我儘をしたいわけではない。ただ、受け止めてもらいたかったのだ。逃避行のさなか、父を失ってからの母は、私の判断に唯々諾々と従うだけの従順な子どものようになつてしまつていた。私の甘やかな少女時代は脆くも崩壊し、

好むと好まざるとにかかわらず、私自身が執拗なあいつらの追跡を分析し、判断し続ける日々を過ごさざるを得なくなつていたので。

何度も訪れるぎりぎりの判断を求められる瞬間。自分の決断が誤りだったとき、母と自分の命は奪われ、そして父との約束が果たされなくなる。その不安と焦燥の中で、私は幾度も母に気付かれないように声を殺して一人で泣いた。

だが、どんな判断も、どんな行動も、きつと、ポンペはそのままに受け入れてくれるように思う。そして、私の不安や焦燥感も、喜びや高揚感も、自分のことのように感じてくれるのではないだろうか。だから、私の不安や怒りを、誰よりも的確に感じ取ってくれたのだと思う。逃避行をはじめから、他人に対して安心と信頼を感じたことはなかったし、何より好悪の感情を越えて他人に興味を抱くこともなかった。そう、ポンペに会うまでは。そこまで考えて、私は、自分自身が途端に覚束なくなった。ポンペを引つ叩いたことが、非常に幼稚で、ただのわがままな子どものしたことのように思えてならなくなった。

「あやまらないで。アタシも、いきなり叩いたりして……ごめんなきい」

頭を下げて謝罪の言葉を口にした私が顔をあげると、ポンペが困惑したような表情で私を見つめていた。丸い目が、注意深くものを見ようとするかのように細くなる。口元が何度か開いては閉じる。何かを言い出しかねているのがわかつた。

「な、なに？」

何故かうるたえながら聞いた私の顔を見遣つたポンペは、決意を固めたとでもいうように、一瞬口元をきゅつと引き結んだ後におずおずと口を開いた。

「えーと、急にそんなこと言い出して、ゴンチョンか何かが取りついたの……かな？おたく、ホントにアイギナ？」

……ゴンチョン？

次の瞬間、私の拳が再びポンペの顔面をとらえていた。

## 「ヴァラスカ・ルー」

こうも天気がいいと、待つ身には少々堪えるものだ。

左手にねじくれた木々の密生する鬱蒼としたダークウッド森を見ながら、俺はキルデリクの馬車が来るのをずっと待っていた。ナマズ川を背に、早朝からずっと往来の真ん中で立ち続けていたが、日は高くなり、じりじりと俺に照り付けてくる。

太り肉の俺は、先ほどからだだらだと汗を流し、何度も粗く大きい息を吐きだしている。どんな強敵と打ち合った時でも息が上がったことがないのが自慢だったが、炎天下でじつと待つということが、ことのほか身体に負担を強いていることに、我ながら苦笑せざるを得なかった。

……痩せるべきなんだろうかね？

あふれ出る汗をぬぐいながら、一人こちる。俺の心は落ち着いていた。感情の起伏が激しく、いったん怒りに頭の中が支配されると血を見なくては収まらない自分だったが、登場を待ちわびる相手のことを思うと、早く会いたいという焦燥感はあるが、心を揺らすのはその感情だけだった。

「ジリブランに過ぎたるもの」という二つ名を持つ、ドワーフの中のドワーフと言われるキルデリク。俺がその名を強く印象付けられたのは、ストーンブリッジをめぐるヒル・トロールとの戦いで輝かしい武勲よりも、巷間よく知られた、冒険者としての活躍だった。

かつてキルデリクは、人間の冒険者ふたりと共にアランシア中を放浪した。すでにストーンブリッジいちの勇者の名を欲しいままにしていた彼が、どうしてそのようなことになったのかは諸説あるが、要は、そぞろ神のものにつきて何とやらで、冒険心が抑えられなくなったのだろう。

もはやどこからが本場で、どこまでが嘘かがわからなくなっているキルデリクの冒険譚だが、どの物語でも共通して語られる、その圧倒的な戦闘力は、いつも俺の心を躍らせてくれた。自分の何倍も大きいヒル・トロールと長年戦ってきた戦法は、それ以外の悪漢や凶悪なモンスターたちにも有効だった。キルデリクは長い放浪中、その身にほとんど傷を負うことが

ないままに、自分の数倍の大きさを誇る難敵を次々にその戦斧の錆に変えてきたのだ。

いわば、俺の憧れの存在だった。生まれも育ちもあやふやで、文字通り泥水を啜って育った自分にとつて、薄汚い地下室や、腐臭や死臭にまみれたほの暗い路地裏で仲間から聞くキルデリクたちの冒険譚は、まっとうに心を躍らせることができる、ほとんど唯一のものであった。

それだけに、キルデリクの仲間だったバシンと戦ったときは、同じく憧れの存在と刃を合わせる喜びで、ザラダン・マーからの「捕らえて連行すること」という指示を忘れて、思わず殺しちまった。

「伊達者」という二つ名で呼ばれたバシンは、たぶん、四十をいくつかに超えていたと思うが、冒険譚で謳われた通りの凄腕だった。自分の悲惨な人生の中で、俺がもつとも留飲を下げるときというのは、地位や名誉もある存在を惨たらしく殺す瞬間だ。バシンは、もうおっさんだったが、これも冒険譚で言われているように、すらりとした長身に、光を発するような金髪の、苦み走ったふるいつきたくなるような男前だった。

だが、実際の戦いはまったくもってなかつた。バシンは確かに鋭い剣技の持ち主だったが、集中していなかった。そう、俺を相手にしているが、俺を見てはいなかった。俺の心はいたく傷ついた。俺は舐められていたんだ。ダラマスの馬鹿も余計なことをしてくれた。ザラダン・マーの命令を完璧にこなそうとして、バシンの集中力を散漫にさせた。ヤツはヤツで、俺の支援をしながら、母娘を捕えようとしたのだが、結果的に、バシンは死に、母娘には逃げられた。ザラダン・マーの命令は何一つ守られなかったというわけだ。

挙句、ダラマスは、ザラダン・マーに、「ヴァラスカ・ルーの独断専行が任務失敗の原因だった」としたり顔で報告しやがった。その報告があったからかどうかは知らないが、俺はこの件から外された。なので、現在の状況は俺が独自に探っているし、色々やっている。これは本当の独断専行だ。結果、ザラダン・マーが怒り狂って俺をマランハの実験体にしようがどうなるかが知ったこっちゃない。俺の中の鬱屈した気分を晴らすため

だ。俺は自分を舐めるヤツらを許さねえ。タイタン中のどこまででも追いかけて行って、俺を舐めた代償をしつかりと払わせるんだ。当のバシンが、タイタンに後ろ足で砂をかけて出ていっちゃったからには、その帳尻合わせは、昔の仲間にもらうしかない。そんなもんだ。

ザラダン・マーの考えが変わった理由はわかっている。ザラダンは、ヴォルゲラ・ダークストームを憎んでいるし、怖れて居る。かつては、ダークストームの憑代である娘を捕え、その秘儀を我が物にして、ダークストームをこの世界から完璧に消滅させようとしていた。だが、どうやってか知らないが、捕らえてダークストームを尋問してやるような余裕がないことに、ザラダンは気がついたのだ。そしてザラダンの考えは、狡猾なものになっていく。ストーンブリッジに逃げ込んだ母娘がキルデリクを頼ることは、ほぼ確実だった。そしてキルデリクがヤズトロモを頼ることも。状況を見ながらザラダンは、ダークストームとヤズトロモをぶつけ合おうと考えたのだ。あわよくば共倒れ、またはどちらかが勝利を収めても、無事ではいられまい。なので、俺ではない誰かが、娘の中のダークストームを最適な場所と時間に物質界へ引っ張り出す役目を負って動いているはずだ。

……俺の役目じゃなくてよかったぜ

その瞬間だった。俺の左目が街道をゆっくりと進んでくる馬車を視界にとらえた。御者台の人間の子どもの様に見える存在は、間違いないドワーフだ。街道の真ん中へ、抜身の段平を構えて、俺は悠然と足を運んだ。

馬車が俺の目の前で止まる。御者台には、果たしてドワーフが一人。

「キルデリクだな」

俺の問いに、ドワーフは静かにうなずいて、御者台の上から周囲を見渡す。

「お前ひとりか？」

「そうだ、俺様、ヴァラスカ・ルーひとりが、お前、キルデリクをお待ちかねってことよ」

口ひげに覆われたキルデリクの口元が、裂けんばかりに吊り上がり、白い歯が見えた。途端に、俺の中を戦慄が走る。御者台から、戦斧片手に軽

く飛び降りたキルデリクは、俺の方に無造作に足を向けていた。

「キルデリクと知ってひとりで待ち伏せか。ワシも舐められたもんだな」

口調は穏やかだった。金壺眼は、どこか楽しむようにくるくると動いている。そして、ずっと薄笑い。俺はまた舐められていた。だが、俺の身体の中から、先ほどからずっと戦慄が、言いようのない慄きが去らない。身体全体が強張り、指一本動かすのもぎこちなく心もとなく感じる。地面に足が縫い付けられたように踏み出すことができない。完全に俺はキルデリクに位負けしていた。

……クソ！クソ！クソつたれ！

俺は自分自身を罵った。激しく噛んだ下唇が裂け、血が流れた。身震いを止めたい。止めて段平を構えて、目の前のドワーフを八つ裂きにしてやりたい。そうだ、何のために俺はここに居る？ビビってしっぽをまいて逃げ出すためじゃない。やってやるんだ。俺を舐めたヤツらは許さない。そうだろ？

「おうよ！キルデリクだから待ってたのよ！俺は、こないだ、「伊達者」バシンを斃した、ヴァラスカ・ルーだ。となれば、次はお前ってことよ、自明のことだ！」

「ヴァラスカ・ルーか。名前を聞いてしまえば、応じざるを得ない悪名だ」

キルデリクは薄笑いのまま、戦斧を右手で軽く振ってみせた。

「それに、バシンの死に関わっているならなおさらだ」

キルデリクの顔から笑みが消えた。途端に、周囲の気温がさらに上がったように感じられる。目の前のドワーフが、トロールのように巨大に見える。

キルデリクを「ジリブランに過ぎたるもの」にしてきたもの。それはいきなりやってきた。気付けばキルデリクの姿は視界から消え失せている。地面から何かが伸びあがるようにして俺の胸元めがけて飛んできていた。あらゆる動作が間に合わなかった。唯一首を前に倒し、額で斧の一撃を受

ける事だけが間に合った。額に回していた分厚い鉢鉄が功を奏していた。額から首、肩にかけて、岩でも投げつけられたかという程の衝撃が走った。自分の巨漢が浮いているのを覚知した俺は、恐怖に身を強張らせた。

元々低い重心をさらに低くして相手の打ち込みの下を潜り抜け、地を這うような位置から下半身を狙う。ドワーフとしては常套的な戦法だ。だがキルデリクのそれは、すべてにおいて次元が違っていた。下半身を越えて、真つすぐに首を刈りに来た。何者にもまねできない突進力と跳躍力にドワーフらしからぬ俊敏さ。圧倒的な膂力。

激しく背中を打った俺は、息を大きく吐き出した。吐き出しながら、右側に身を転がした。先ほど自分が叩きつけられた地面に戦斧が突き刺さる。転がした身を必死で起こした俺は、段平をキルデリクの横面めがけて叩きこむ。

戦斧を地面から引き抜きながら、キルデリクは段平の一撃を躲し、引き抜いた動作そのままに俺のから空きの胴を薙いだ。

ひゅつと太鼓腹を一瞬ひっこめると、戦斧の先が鎖帷子の表面を削り取っていく。太っているということは、悪いことばかりではない。キルデリクが次の動作に移る数瞬。俺は右手に倒れるようにして体勢を流して間合いを切った。最初のやりとりが無傷で済んだことで、俺の中の慄きは消えている。

キルデリクは体調がすぐれない。かつてのような斧働きはできない。斥候たちは異口同音に報告していた。

報告は間違っていないだろう。たぶん、これは、全盛期のキルデリクではない。だが、間違いないことは、これまで俺が対峙してきたどんな相手よりも難敵だということだ。いや、難敵どころか、俺の技量からしてみれば、こうして初撃のやりとりで死ななかつただけで僥倖と言っている、圧倒的な強敵だ。

……だからこそよ、これだからやめられねえのよ  
俺の心は沸き立っていた。激しく高ぶっていた。心だけではない。段平を握る手も、地面を捉えて立つ足も、心臓の鼓動の都度、熱い血潮がそれ

ぞれの血管を流れるのが実感できた。死に近づけば近づくほど、生きていることが実感できる。我ながら難儀なことだとは思うが、この実感を求めて、俺はこれまでずっと死地に身を晒してきた。

どこかでカラスが鳴いている。耳障りではない。どこか、俺たちの戦いを楽しんでいる風ですらある。そんなことを頭の隅で考えながら、俺はキルデリクに目を据えている。

キルデリクの肩が上下していることに気付いた。息が荒い。視線の照準はこちらに合わせたままだが、身体を動かすことができないのだ。気付くやいなや、俺は跳んだ。だがそれは畏だった。跳んできた段平を弾き飛ばしながら、キルデリクは戦斧の石突で、俺のみぞおちを強打した。

心臓が砕け飛んだような衝撃。身を折る、いや、身体の動きを一瞬でも止めれば、首が飛ぶ。頭ではわかっている。わかっているが、俺の身体は悲鳴をあげ、次の瞬間、内臓そのものを吐き出さんばかりの勢いで嘔吐した。

……ゲロまみれで死ぬのか

これまでの汚物にまみれた人生が脳裏にフラッシュバックする。最後の最後まで、汚れ、汚臭を発し続ける人生。すべてのものに舐められ、馬鹿にされ、顧みられることなく、ポート・ブラックサンドの側溝に流されて、ナマズ川に沈んでいく酔漢のゲロのような人生。

怒り、焦り、悲しみ、そして恐怖。次々と湧き上がる感情がもつれあい絡み合いながら、俺の脳内で爆発する。そして、ただ死にたくないという渴望だけが残る。渴望に引きずられるように身体が覚醒する。視界が戻る。次の瞬間訪れるはずの戦斧の斬撃を、どうにかして受けきれぬか、はたまたま躲せるのか。だが、戦斧が俺に振り落とされることはなかった。

一瞬の精神的な自失から戻った俺は、目の前でキルデリクが仰向けに倒れているのを見た。その光景は俺を混乱させた。

不意に視界が暗転する。額でキルデリクの斬撃を受けたからか、先ほどの石突の一撃が心臓を砕いていたからか、俺にはわからない。だが、もう、指一本すら動かせなかつた。足がふらつく。膝が落ちそうだ。不意

に、カラスの鳴き声が聞こえた。次の瞬間、俺は地面に倒れこみ、真つ暗い深淵に意識を引きずり込まれた。

### 〜キルデリク〜

まだ店を開ける時間じゃない。誰だ、こんな時間に。違うな、ここは店じゃないな。うーん、薄暗くてよくわからんな。誰だ、そこに居るのは。なんだ、誰かと思つたら、バシンか？久しぶりにストーンブリッジに里帰りか。老けたな。なに？アイギナ？ああ、お前の娘じゃろ。さつきもいっしょだった。それに大丈夫。ポンペが一緒だ。ん？ポンペを知らなかったか。そうか。あれが生まれた頃はそんなにやり取りはしてなかったようだしな。そういえば、おかしいな。お前、死んだんじゃろ？これは、夢？いや、あれか、ワシも死んだのか。ふーむ。一回死んで来いとかいうヤツもいるが、実際生きてるとそう変わらん気がするな。しかし、お前の娘の見立て通りじゃったな。お前の娘、凄いの。ワシ、いつ死んでもおかしくなかったのに、少しいい恰好し過ぎたみたいじゃ。ここぞというときに心臓が止まってしまいおった。ヴァラスカ・ルーは、お前を斃しただけあって、なかなかいい腕じゃったが、ワシの敵ではなかったの。それが確認できただけでも、まあ、悔いはないがの。え、ワシの囃作戦が無意味だったって？どういうことだ。ヴァラスカ・ルーに見破られていた？まあ、そりゃそうじゃろ。単純な方法じゃもの。けど、ヴァラスカ・ルーをポンペたちから引き離れた。ワシの名前に釣られてくる馬鹿ほど、危険じゃからな。ああ、そうだ。ヴァラスカ・ルーとやりあつてるときに、あの性悪カラスが飛んできての。そう、ヴァーミスラックスだ。いつもあれくらの時間にあのあたりをフラフラ飛んでるんじゃが、間に合わないかと思つてひやひやしたが、どうにか間に合った。最後にあの甘党に伝言を頼むことができた。ん？なんじゃその顔は。ワシがあの甘党に最後の最後にすがつたのが、そんなに愉快か。まあ、いい。実際、こんな面倒なことをどうにかできるのは、あれだけじゃ。あれも直に動かんとならんじゃろ。相手が

相手だしな。それはそうと、ワシより先に死におつて。なんじゃ、この体たらくは。ん？たいていの人間はドワーフより寿命が短い？そういうことじゃないじゃろ。お前たちは、ワシよりどれくらい若かったと思つてる。若いくせにさつきと死におつて。おかげで、お前らの子どもの面倒をワシがみるはめになつてるじゃないか。感謝してるのか。そりゃそうじゃ。そうでなくてはな。そういえば、あいつはどうしてる。元気か？死人に対して元気にしてるかと聞くのもおかしな話じゃが、あいつの顔も久しぶりに見たいのう。あいつに教えてやりたいが、ポンペはいいヤツに育っている。きつと、育て方がよかつたんじゃな。だが、腸詰の香辛料の配分について教えてやれなかつたのが心残りだな。まあ、あいつはあいつの味を見つけていくじゃろ。きつとな……。

### 〜ポンペ その3〜

ダークウッドの森に夕闇が迫る頃、ワイらはクインの小屋にたどり着いた。夕食は、クインが前にウチの肉屋を訪ねて来た時に親方が持たせてやった腸詰を茹でたのが出た。小屋には不釣り合いなほど大きく、そして古びたテーブルを囲んで三人は黙々と食べ続けた。ワイのいらぬ一言ですっかり機嫌が悪くなつたアイギナを刺激しないように、クインもワイも極力余計なことを言わんようにしていた。確かに、ゴンチョンはまづかった。せめて、シエイプチェンジャーくらいにしておけばよかった。だが、長い沈黙に耐え切れなかつたのと、肉の旨味と香辛料の配合の生み出す絶妙なハーモニーに舌鼓を打ちながら、気分がすっかり上向きになったこともあり、ワイは、ずつと心に引つ掛かつていたことを口に出してみた。

「親方の方は、首尾よく行つたかの？」

アイギナは、ワイに視線を向けて、無造作に答えた。

「こつちに追手が来ていないということは、囃は成功ということじゃなにかしら」

こちらに向けられた視線が瞬時に逸らされたことと、無機質な口調か

ら、まだアイギナの機嫌が直っていないことがわかった。

「なら、親方とはヤズトロモンとここで会えるでんな」

「まあ、それはそうだろうが……」

クインが気の毒そうな表情でワイを見た。

「囿がうまくいったということは、キルデリクのところは追手が行ったということだろ。となると、あつちはかなり大変なんじゃないか。もつとも、キルデリクなら、よほどのことが無い限り大丈夫だろうが」

クインは続けて、「あぐく、疲れたから帰るとか言ってストーンブリッジに戻ってるかもな」と、ワイの肩を強く叩いた。心配するなという感じだった。

ワイにとって、親方は肉屋の親方であって、周囲が言うような、凄惨戦士のキルデリクではなかった。店の隅で背中を丸めて白湯を啜っている後ろ姿を思い出して、ワイは、思わず立ち上がっていた。

「親方を助けにいかんと！」

「もう、遅いわ」

アイギナがワイと同じように立ち上がって、こちらをまっすぐに見ていた。

「クインの言うとおり、追手が東の街道の方で待ち構えていたとしたら、キルデリクにとっては、大変な状況になったはず。でも、今のアタシたちは、そこから離れた西側の森の中に居る。今から駆け付けても色々間に合わない」

「そんな……」

敵に囲まれた親方を想像して、ワイは矢も楯もたまらなくなった。今すぐにもクインの小屋を出ていき、親方のもとへ飛んでいきたい。ワイは、ほとんど無意識に体を小屋の出入り口の方に向けていた。

「それに」

ワイの背中に突き刺さるように、アイギナが冷たく言葉をつなぐ。

「あんたは、アタシをヤズトロモのところまで連れていくんでしょ？」  
振り返ったワイの視線を受けて、アイギナは言葉を続ける。

「アタシをあんたに預けると言われた時、不安に思ったアタシに、キルデリクが、あんたは愚かでも臆病でもないから大丈夫だって言ったの。そしてキルデリクは、自ら囿になった。一番危険な役割を買って出た。それは、あんたが、アタシをちゃんとヤズトロモのところまで連れていけるって信頼していたからでしょ？」

アイギナの口調は、平板なものから、起伏のあるものに変わり、色素の薄い青色の瞳は、ワイから離れなかった。

「それでも、親方に何かあつたら、意味ないんや。ワイ、親方から、まだ何にも肉屋のことを教わってないねん」

アイギナはワイの言葉を受けて、視線をそらして床を見た。

「キルデリクの信頼を裏切らない方がいい。だって、あの人は、きつともう……」

ワイは、視線を床に置いて歯切れの悪くなったアイギナの姿に、少し苛立った。

「きつともう、なんや？」

とげとげしくなったワイの声に、アイギナはゆっくりと視線をあげた。その表情は、何かをあきらめたように、どこか脱力して見えた。

「信じる信じないは勝手だけれど、アタシは一目で人の身体の様子がわかる。その人自身すら気付いていないような体調の変化まで。アタシはこれで周囲から気味悪がられてきたけれど、結構重宝する能力だった。アタシの診立てでは、キルデリクの心臓はひどく弱っていて、いつ死んでもおかしくない体だった。そのことを教えても、彼は囿になることを自分から提案した。あの日、肉屋に帰った後、どういう話をあんたとしたのかは知らないけれど、キルデリクは覚悟の上だったと思う」

そこまで言って、アイギナは、大きく息を吐いた。アイギナの言葉を、ワイは必死で受け止めて理解しようとした。あの夜は、さっさと寝ることを親方に命じられ、ろくに話もできなかった。ただ、無愛想な親方には珍しく笑顔を見せながら、ワイがアイギナを連れてダークウッドの森に入るよう、話をしてくれた。そして、なぜか、猟犬を象ったペンダントを、お

守りだと言って渡してくれた。あの時の親方の様子は、体の不調などみじんも感じさせず、むしろ快活そうに見えた。親方がいつ死んでもおかしくないなど、にわかには信じられなかった。これまでのように、アイギナがワイを言葉でなぶって楽しむ魂胆でそんなことを言っていると思いたかった。

だが、息を吐ききって顔をあげたアイギナの表情は、微塵も揺るぎのない冷たく硬いもの変わっていた。

その表情から、ワイは気付いた。いや、確証を得た。

「……親方は、自分で死に行った。そして、アイギナはそれを知っていて止めなかった」

なんとかそこまで声を絞り出したワイに、アイギナは微かに顎を引くようにして頷いて見せた。

「なんで？」

「アタシが助かる可能性が高まるから」

言い放ったアイギナの瞳の冷たさ、口調の無機質さに、ワイの背筋が凍りつく。これまで、この少女のどこを見ていたのだろう。彼女の心の有り様の何に惹かれていたのだろう。じつと見つめるうちに、こちらをゆるぎなく見返しているアイギナの瞳の色が、ワイの周囲に広がっていくような気がした。青く冷たい色だ。その色はやがてワイを飲み込み、周囲は白く青く冷たい空間で包まれる。身体に力が入らない。ワイは混乱していた。親方の姿、何気ない肉屋での日々が脳裏に切れ切れに甦り、ワイは喘いだ。

「それでも、アタシは生き延びるんだ」

アイギナの言葉は、さらにワイを慄かせる。

「そして、アタシたちにした報いを、あいつらに受けさせる」

「……そんな」

ワイをからかって笑う。勝手にふらふらと道はずれて森の中に入っていく。引つ叩いたり、殴ったりする。それら全部は、アイギナのこれまでの逃避行があまりに凄惨だったことと、ワイへの信頼感の裏返しだと思っ

ていた。だが、アイギナの奥底に、冷たく恐ろしいものが潜んでいる。それは、いつでもアイギナに影響を及ぼしているのかもしれない。そして、常にその疑惑が、他ならぬ彼女自身を追い詰めていく。彼女が何かを考え、実行するとき、それは、その意志に影響されていないと言いつけるのか。

「ゴンチョンとかの方が、まだマシやないか」

アイギナの中に潜む恐ろしい存在について、アイギナ自身が一番悩み苦しんでいること、そのために、親を失う程の凄惨な逃避行をしてきたこと。それらを理解してもなお、ワイは、言葉が続けることを止められなかった。ワイを信頼しているようで、結局何一つワイに言わずに危地へ赴いた親方や、そうと知りつつ黙って親方を利用したアイギナへの怒りなどがないまぜになった暗い気分が、ワイにアイギナを傷つけるための言葉を継がせた。

「アイギナ本人の方が、ゴンチョンやシェイプチェンジャーみたいな連中より、ずっとずるくて悪いヤツやないか？」

ワイの言葉に、アイギナは顔色を変えなかった。青い瞳が、すっと一瞬何か眩しいものを見た時のように細められただけだった。先刻、「ゴンチョン」と言われて激昂してワイを殴り飛ばしたアイギナが、今度は、微塵も動揺しなかった。

「アタシに憑りついて操ったり、アタシになりすましたりするなんて、絶対に許さない。アタシはなんでも自分の意志で決める。アタシはアタシなんだ」

だから寄生して宿主の精神を乗っ取ることで悪名高い「ゴンチョン」と言われて怒ったと言いたいんやろう。

「アタシはアタシなんだ」

自分に言い聞かせるように、アイギナは失った顎を少し持ち上げてもう一度言った。ワイにはわかっていた。アイギナは、自分の中の悪といつでも向き合っている。何度も自分は自分なのだと言い続けないと、自分の判断や決断が、果たして自分のものなのか、自分に寄生しているものの疑惑

なのか、常に疑心暗鬼にならざるを得ないのだ。哀れな話やった。そんなアイギナへの同情や憐みが、ここまで一緒に来た動機だったはずなのに、ワイの気持ちは以前残酷なままだった。

「自分が自分であることを証明するためには、他人を利用してかまわんということだな」

「そうよ」

目をむいて、アイギナは言い切った。

売り言葉に買い言葉でないことは、わかった。生き延びたい。生きて、自分が自分であることを証明したい。それだけで、アイギナはいくらでも傲慢で酷薄になれると宣言したのだ。大きく裏切られたという気持ちと、アイギナ自身も苦しんでいるのではないかと、まだアイギナを信じた気持ちとで、ワイの気持ちはぐちゃぐちゃになっていた。

「それは、本当にアイギナの考え方なんやな？」

「そうよ」

即答だった。そう言い切りたい。そう言い切らねば、アイギナはアイギナではいられない。例え、それがどんなに辛く厳しい状況を自分に招くことになってもだ。自分が何かの考えに支配されて動いていること、その何かを認めざるを得なくなるということを、アイギナはたとえ感じていたとしても、絶対に認めないだろう。そんなアイギナの非情な運命に、ワイは心底悲しみを覚えていた。このまま、アイギナの傍らで、過不足なく彼女を彼女足らしめてやりたい。痛切な気持ちワイの心の中に満ちた。だが同時に、傲慢で酷薄なアイギナに怖気を震う気持ちでいることも確かだった。自分が自分であると証明するためならば、あらゆる非道を是とする恐ろしさをアイギナは持っていた。アイギナが、そうした非道を、自分の考えであると切り切るしかできないのであれば、ワイが言う言葉の選択肢もほとんどなくなっていた。

「なら、終わりや。ワイは、もう、アイギナを案内できんわい。こんな人でなしとこれからも一緒なんて、まっぴらごめんや」

「そう、わかった」

アイギナの口調は変わらず、表情は平板なままだった。ワイらのただならぬ状況に、クインは、何か言おうとしたらしく、腰を半ば浮かせて身を乗り出した。その時、アイギナが何かをつぶやくと、誰が触れたわけでもないのに、テーブルが床を滑るようにして中腰のクインの腹部に突き刺さった。腸話を乗せていた皿ごと床に散乱すると同時に、クインがすさまじい音をたてて床に倒れこむ。何が起きたのかよくわからずに呆気に取られているワイの方に視線を移したアイギナは、また、何かをつぶやいた。そして、形のいい唇の端が、すつと吊り上がったのが見えた。笑ったのだ。

「もう、うんざりよ。あんたなんか、最初っから嫌いだっし、会って二日くらいの人間に、ここまで言われる筋合いはない。こっちから願ひ下げ。あんたたちとは、ここで別れ。じゃあね」

アイギナは、口の端に笑みを張りつかせたまま、出入り口のドアに手をかけた。

追いかけてようとしたワイの足元の靴が床から離れずに、ワイはバランスを崩して床に盛大な音をたてて転がった。脱げた靴だけが床に残っているのを見ながら、親方の指示で家に腸話を持って行ったとき、アイギナが手のひらに火を起こしたことを思い出していた。

……魔女は、アイギナやったんや

黒ローブを着て、怪しげな術を用いる魔女が住み着いたと、大はしやぎで噂話に興じていた自分や遊び仲間のことを、はるか昔の出来事のように思い出した。目の前の魔女は、黒いローブを身にまとわず、それらしい杖も、ゴブリンの歯やコウモリの糞などの隠微な触媒も持つてはいない、やせっぽちのみすぼらしい少女だった。そして、用いる魔法は、周囲に小さい改変しか与えないものの、その与える影響は十分に大きかった。

ドアにかけた手はそのままに、アイギナは床に転がっているワイを見下ろした。その瞳の虹彩は、先ほどまでの色素の薄い美しい青色ではなくなっていた。ぼんやりと内から金色がかかった鈍い色で光り出していた。その両目に見据えられたワイは、夜の獣が、炎に魅入られていながら、恐怖を感じるときのような、魅惑的で原初的な恐怖に体を慄かせた。



ついで、と、何も言わずにワイから視線をあげたアイギナが外へ出ていった。

ダークウッドの森の、月灯りも星の光も届かぬ暗がり、開け放たれたドアの向こうから、小屋の中で転げたままのワイら二人を見つめていた。

## く大魔導師アラゴン その2

私は何時間もダークウッドの森を彷徨っていた。

家を出た私は、ナマズ川を小舟で渡った。岸を上がるとそのまま木々がひしめき合う中を南へ向かって歩いた。周囲の木々はどれもおそろしく年を経た大木で、枝と枝とが絡み合って、葉が一枚もないのに、ルナーラの光すら届かない漆黒の闇を生み出している。

グランタンカが顔を出すまではこの状態が続くが、方角は間違っていないはずだった。「お嬢様」の子どもである「門」は、ヤストロモの塔を指しているはずだからだ。

「お嬢様」の太ももに、「鍵」を刺し込んだ感覚が不意に生々しく思い出された。泣き叫ぶ「お嬢様」が私にもたらした罪悪感と後悔は、私を師匠の恐怖と屈辱のくびきから解き放ってくれた。以来、私は「お嬢様」の幸福のために生きた。「お嬢様」へ危害を加えさせることは絶対に阻止しなくてはならない。私はその一念で「門」の行方を追った。

だが実際にどうやって師匠を出し抜くのかは、「門」に会ってから考えなくてはならないと思っていた。想定している具体的な方法は何もなかったが、逸る気持ちだけが不安を押しつけて、私の歩みを速めさせた。

やがて、グランタンカの気配が、密生したねじくれた枝張りの古木の間から感じられるようになった。ダークウッドの森ならではの薄暗い朝が来ていた。

湿気の強さと、何かの死臭のような好ましからざる匂いが、一面に漂う。朝のダークウッドの森の特徴だ。清澄とは程遠いダークウッドの森の朝の空間を、私は足を速めた。何か当てがあつた訳ではなかった。だが、

よどんだ空気の中に、「お嬢様」に似た雰囲気が潜んでいるのを、私は確かに感じていた。

正確には、師匠の雰囲気だ。抜身の鋭い刃物を手の平に乗せたときのような、危険だが魅入られてしまうような、あの感覚。気付いたときには、足が固まっていた。あやうく転げそうになって、足を踏ん張った瞬間、何か素早く身を寄せてきて、私の顎の下に鋭くどがったナイフを突きつけていた。

「背負袋の中を改めさせてもらうぞ」

それは少女だった。だが、一目見てわかった。「門」だ。髪も目の色も違いが、面差しが「お嬢様」によく似ている。そして何より、私が気付く間もなく私の足を地面に縫い付けたまじないからする匂いが、師匠その人のようだった。

私は背負袋を地面におろした。

「中のものを出せ」

ナイフを突きつけながら少女が命じるのに、私はおとなしく従った。声がどこか「お嬢様」に似ているのがうれしかった。背負袋から、小さい灰色の塊の入ったガラス瓶を取り出す。シェイプチェンジャーの脳みその酔漬けだ。ダークウッドの森を歩く際には、シェイプチェンジャーに警戒する必要がある、なるべく持ち歩くようにしているものだ。他には、ランタン、ロープ、携帯食など、ありふれたものを出すと背負袋は空になった。

「ロープを脱げ」

少女の命令で、私は羽織っていたロープを脱いだ。胸元に輝く、銀の鎖でネックレス状にして首にかけている小さな宝石を、少女が訝し気に見る。宝石は、琥珀の眼と呼ばれるもので、師匠の置き土産の一つだった。

師匠は、「このネックレスを首にかけ、汝のおそれるものをば呼ばわれ。いかなる答えあるとも、汝の聞きしものは真実のみ」と、私に教えてくれたが、実際に役についたことがないまま、現在に至っている。とはいえず、吝嗇極まりない師匠が、無条件で私にくれた数少ないもののひとつで

あり、かつ、最も質のよさそうなものだったので、お守り代わりに首にかけているものだった。

不意に琥珀の眼が鈍い光を発しはじめた。少女が興味深げにその光に顔を近づける。「汝の聞きしものは真実のみ」という師匠の言葉が不意に頭をよぎった。嘘を見抜く力を持っているだろう宝石が光り出したということとは、この少女自体に虚偽が秘められているということなのだろうか。

「ほう、琥珀の眼を身に着けているのか、おぬしにしては感心なことよの」

琥珀の眼から視線をあげた少女の口ぶりが、師匠のそれに変わった。内から光を発しているように見える瞳が、私を見据えた。

琥珀の眼が光ったのは、見た目が少女の姿ということに虚偽があるということだろうか。そして、この口ぶりから、師匠が少女の内に巣くっているのは間違いないように思える。しかし、いつの間にか少女の肉体を奪ったのだろうか。門を開く前であれば、受肉は不可能なはずなのに。想定を超えた師匠の動き方に、私は身構えた。

「おぬしは、鍵をどうしたのだ？」

そんな私の動揺に気付いているのかいなのか、少女のなりをした師匠は、ナイフの刃先を私の顎の下で押し上げた。あとほんの少しでも師匠が力を入れれば、私の喉は切り裂かれるだろう。

「その時が近い。僕もかなり門に近づいているので、このように干渉できる。だがそれでも、この肉体を得るには、鍵が要る。何より、この娘の精神は、僕に似て、我が強くてなかなか言いなりにならん。よって、僕がこのように干渉できる時間はかなり限られている。よいか、僕が関わっていられる時間内に、決められておるとおり、おぬしがやるのじや。よいな」

噛んで含めるように、少女の口から師匠の言葉が聞こえてくるのは、なんとも不気味だった。

「鍵は、別所に預けてあり、私は持っていない」

ナイフの刃先を感じながら、私はどうにか口にする。少女が目を剥い

た。金色に近い輝きが瞳の中で揺れる。

「いつの間にか、そんなことをしたのだ。とにかく時間が無い。そこへ行くぞ」

少女の姿の師匠はそう言うと、私の尻を蹴とばす。ナイフの刃先の恐怖から逃れられた安堵感に一瞬浸るが、すぐに暗澹とした気持ちになった。ここが正念場だった。師匠を鍵の場所まで連れて行けば、なし崩し的に鍵を用いて儀式を実行せずにはいられなくなるだろう。師匠が物質界へ復活できないようにすること、そのためには、まずはこの干渉状態を解消することが必要だった。

師匠を再び門の奥へ追いやるためにも、この少女の精神の強さが、焦点になっっている。どこまで師匠に抗えるのか。もしくは抗っているのか。師匠の干渉をはねのける力があるのかないのか。どうにかして、少女の精神と師匠の幽体の現在の状況を知ることができないものか。私は焦燥にかられながら足を運んだ。

鍵は、ダークウッドの森のかなり南、ヤズトロモの塔が視認できるほど南端に近い小屋に住む魔女が持っていた。いぼいぼの鼻をしたしわくちやの老婆である魔女は、いつも邪なことを考えながら、無知で従順な、同じく老婆の召使とともに暮らしている。

魔女は師匠の古いなじみで、かつてはその子分のようにして悪事に手を染めていた。私は、ダークウッドの森に落ち着いてすぐに、魔女に鍵を預けた。そのことを道すがら師匠に教えると、少女の姿の師匠は、かたちのいい眉を歪めて露骨に不満の声を漏らした。

魔女は鍵について、師匠が非常に大切にしていたものだという私の言葉だけで、計り知れない魔術的な価値のあるものだと思込込だ。強欲な魔女の、師匠本人が返せと迫っても簡単には返しはしないだろう。師匠は魔女のそうした強欲さを十分把握していた。そしてその強欲さに私は期待したのだ。彼女ならば、どんな困難があろうとも、例えば師匠に殺されようとも、一度手に入れたアーティファクトを簡単に手放すことは絶対にありえなかった。

少女の精神力と魔女の強欲が、今この時点で、師匠を物質界に復活させないために最も重要な要素になっていた。

「趣味の悪い建物じゃな」

思案しながら歩いていた私は、少女の軽やかな声で発せられる師匠の言葉で我に返った。少女の視線の先を見遣った私は、そこにダークウッドの森を見下ろすかのようにしてそびえるヤズトロモの塔を当然のように望見した。ヤズトロモは、望景鏡という遙か遠くまで見通せる魔法の道具で、アランシアのありとあらゆる悪を見張っているという噂だが、塔のすぐそばを、ダークストームの憑代が足を進めていることに気が付いているだろうか。もし気が付いているとしたら、彼はどう行動するのだろうか。ひょっとして、ヤズトロモが現れて、師匠を異界へ封印してくれるかもしれないと、私は夢想したが、同時にそんな都合よく物事が進むはずのないこともわかっていた。「門」が閉じるとき、この少女は、かつての「お嬢様」のときのように相応の影響を心身に衝撃として受けるはずだった。逆にヤズトロモが門を自在に閉じることができるようになるほど異界に対する造詣が深いのであれば、なおさら少女の心身への影響を考えて、私が夢想したような行動はとらないはずだった。ダークウッドの森にやってきて、少なからず交流を持つことになったヤズトロモはそういう魔術師だった。

やがて、我々の前に煙突から煙を出している丸太小屋が見えてくる。魔女の住んでいる小屋だ。粗末な木の扉を叩くと、中から例の老婆の召使の聲が聞こえた。

「私だ、アラゴンだ」

馴染みの私の声に安心したのか、そっと扉が開き、召使に中へと招き入れられた。通された煤けて汚れた部屋の奥の暖炉では赤々と火が踊り、その前で粗末な服を着た老婆が座って本を読んでいる。

「何か用か？」

書物から目を離さずに魔女が私に声をかけた。

「ずいぶんな挨拶だな、久々だというのに」

いつの間にか私の傍らに来て魔女をのぞき込んでいた師匠が声をかけ

た。途端に、魔女は派手な音を立てて、大きな凹みや穴の開いている汚らしい床に書物を落としてしまっていた。そのまま顔をあげて、まじまじと少女の姿の師匠を見る。

「ダークストームか？」

魔女が呟くように問うと、少女の形の師匠は黙って頷いた。

不意に、私の背負袋の中でシェイプチェンジヤーの酔潰けの脳みそが震えだした。異変を師匠に告げようとした瞬間、師匠が突然脇から現れた人影に押し倒された。あの老婆の召使が師匠の上に馬乗りになっていた。師匠は倒された際に頭でも打ったのか、汚い床の上に伸びて微塵も動かなかった。

師匠の上から召使が私を見上げた。にやりと皺くちゃの顔で笑った次の瞬間、召使の身体がぐんぐん伸び、肌の色が緑色に変わっていく。大きな棘のある尾がだらりと床に垂れ下がり、長く鋭い爪が伸びる。口は耳元迄裂け、むき出しの鋭い歯がざらりと光る。背負袋の中の振動は激しさを増し、目の前の爬虫類じみた化物がシェイプチェンジヤーであることを教えてくれていた。

私はシェイプチェンジヤーがこちらに飛び掛かってくるのではないかと身構える。

「このまま鍵とダークストームの憑代をザラダンの使いに渡せば、私の仕事は終わる。ここまでダークストームを連れてきてくれたんだ、お前には礼を言わねばならないねえ」

魔女が前歯のない口元を綻ばせる。ザラダンが魔女を取り込み、師匠に罠を張っていたのだ。

「鍵はちゃんと持っているんだな？」

思わず聞いていた。ザラダンは鍵と門をそろえてどうする気だろうか。まさか師匠を物質界に受肉させる気ではないだろう。おそらくは、門と鍵の両方を一度に処分することで、師匠を永久に異界へ幽閉する気なのだ。そうすることが、ザラダンにとっても、アランシア全土にとっても最良の方法だった。だが、自分の娘である「門」が処分されてしまうことを、

「お嬢様」は許すまい。もちろんザラダンは嫌いだった。師匠も嫌いだ  
が、ザラダンへの嫌悪感は一瞬の間が毒蛇を嫌うのと同じような生理的な嫌悪  
が強かった。しかし、今回ばかりは、嫌悪感を越えて、ザラダンのしよ  
うとしていることは正しいように思えた。ただ一点、「お嬢様」の娘に危害  
を加えるということ以外では、私は身が二つに引き裂かれるような苦悩の  
中に陥っていた。

「持っているさ。お前はちゃんと教えてくれなかったが、ダークストー  
ムがこの世界に戻ってくるために必要なものなんだろ？これは値打ちもの  
だよ、大切に肌身離さず持っていたさ」

魔女が肩にかけている粗末なケープをたくし上げると、そこに紐で結わ  
えられた鍵が首からさげられているのが見えた。

その瞬間、鍵が魔女の胸元から姿を消した。次の瞬間にはシェイプチェ  
ンジャーが苦悶の声をあげて、師匠の上から飛び退った。師匠がナイフを  
シェイプチェンジャーの身体から引き抜きながら素早く立った。気付け  
ば、ナイフを握っていない左手に鍵が握られている。「秘匿」のまじない  
だった。

「礼を言おう。今まさにこの瞬間に至るまで鍵を大切に保管していたこ  
とに」

形のいい顎をあげて、師匠が魔女をあざ笑った。

「アラゴンがお前に預けたと言ったとき、正直もう売り払われたと覚悟  
していた」

魔女が師匠を睨みつける。その視線を心地よさげに受けながら、師匠は  
左手の鍵を掲げて見せる。

唸り声をして、シェイプチェンジャーが師匠に襲い掛かった。ナイフを  
突き立てられた脇腹から、だからだと体液が床に滴り落ちた。面倒くさそ  
うに舌打ちをしながらシェイプチェンジャーの方を振り返った師匠は、右  
手のナイフを素早く繰り出す。

シェイプチェンジャーの鋭く長い爪が、師匠の右手からナイフを弾き飛  
ばした。咄嗟に後方へ体勢を動かした師匠の胸元に、シェイプチェンジャ

ーの爪が鋭く延びて、粗末な上着の一部を切り裂いた。  
紙一重で爪の斬撃が肌まで及ぶことを防いだ師匠だったが、気付けば小  
屋の壁際まで追い詰められていた。左手に持っている鍵をナイフの代わり  
のようにして顔の前に構えて応戦する様子を見せる。

不意に、耳障りな音を立てて、小屋の窓ガラスが割れて、外から石礫が  
飛んできた。石礫はシェイプチェンジャーの背中を撃った。振り返ったシ  
エイプチェンジャーの眉間に、再び飛んで来た別の石礫が命中した。

次の瞬間、木の扉が勢いよく開いて、大きな黒い影が飛び込んで来るや  
否や、手に持った丸太のような棍棒をシェイプチェンジャーに打ち下ろし  
た。棍棒を背中に受けたシェイプチェンジャーは、怒りの声をあげて新た  
に登場した敵に挑みかかる。

「お前、クインか」

目の前でシェイプチェンジャーと格闘しているのは、顔なじみの畏師の  
クインだった。なぜクインがシェイプチェンジャーに攻撃をしかけている  
かわからず、私は呆気にとられた。その傍らを丸々と太った少年が飛び込  
んで来る。

手にスリングを持ったままなのが目に入る。先ほどの石礫はこの少年の  
スリングから放たれたものだったのだろう。そのまま少年はわき目もふら  
ずに師匠のもとへ駆け寄った。

傍らに立つ少年を見て、師匠がにやりと相好を崩す。

「先ほどはすまなかったな」

「あ、ああ、あんなの気にしとらんって、それより、どこも怪我はない  
か？」

「怪我はない。むしろ、あの時は、お前たちの方が怪我をしたのではな  
いか」

師匠は少女を通して少年に会っているようだったが、少年は師匠の存在  
を知らないのだろう。

「アイギナ、雰囲気変わったでんな」

少年は、師匠と少女の雰囲気の違いに戸惑うような表情を見せた。

「ポンペ！手を貸せ！」

シェイプチェンジヤーの長い爪を煩そうに棍棒で払いながらクインが叫ぶ。少年「ポンペ」というようだが、クインに相對しているシェイプチェンジヤーの後方から魔女の腰かけていた椅子を持ち上げて叩きつける。

粉々になった椅子を振りはらうように身をよじって、シェイプチェンジヤーは一際大きな叫び声をあげた。クインがとどめとばかりに棍棒を叩きつけようとする。シェイプチェンジヤーが不意にクインに背を向けた。次の瞬間、棍棒を振り上げたクインの眉間が、太くしなやかなシェイプチェンジヤーの尻尾に打ち据えられた。

よるめき倒れたクインは、そのまま師匠にぶつかつた。師匠の手から鍵が落ちる。

鍵を拾いあげたのは魔女だつた。

魔女は、先ほどの師匠にお返しとばかりに、満面の笑みを浮かべた。

「私がザラダンに要請されていたことは、二つあつた。一つは、ダークストームの憑代と鍵を無傷でザラダンに渡す事、それがかなわなかつた場合は、ダークストームを物質界に顕現させること」

魔女は鍵を構えた。床に倒れたままの師匠が半身を起こす。その胸元めがけて、魔女が駆け寄っていく。

私は至近でなりゆきを見ていた。だが、年齢に見合わぬ素早さで師匠にぶつかつたように鍵を突き刺そうとする魔女を止めることができなかつた。

私は混乱していた。なぜザラダンが師匠を受肉させようとするのかがわからなかつた。

混乱は、次の瞬間、さらに深度を増した。

少年が魔女と師匠の間に割つて入つた。鍵は、少年の脇腹に深々と突き刺さつた。

魔女が呪詛の言葉を吐いて倒れこんだ少年を足蹴にする。

シェイプチェンジヤーの咆哮が魔女の小屋の中に轟く。倒れたままのクインにシェイプチェンジヤーが馬乗りになり、長い爪を突き立てようとする。

その時、開いたままの扉の向こうから、シェイプチェンジヤーの甲高い叫び声を切り裂くように鬨の聲に似たカラスの鳴き声が聞こえた。

何が起きたか考える前に、シェイプチェンジヤーの上半身に稲妻のような光がぶつかり爆ぜた。

「衝撃」の呪文だつた。すでに師匠に手傷を負わされ、クインと格闘を続けていたシェイプチェンジヤーは、その一撃で後方へ倒れこみ、息絶えた。

扉を振り返つた魔女が、憎々し気に表情を歪める。

「手に持っているものを渡してもらえんかな？そして、いったんここから出て行つてくれんか。お前さんの家だということは重々知つておるから、後程、お札にわしの持つている道具の内、どれでも一つお前さんの好きなものを進呈しよう」

魔女に語り掛けながら、白髪の上に縁なし帽をかぶつた白髭の老人が、扉を入つてくる。その肩には、艶々とした黒い美しい羽色の大ぶりのカラスがとまり、周囲に興味深げな視線を回している。

垢じみた赤いローブの長い袖を刷くようにして動かしながら、白髭の老人、ゲレス・ヤズトロモは、魔女の顔を覗き込むようにして見た。魔女はその視線を受けて、少しだけ躊躇したもの、少年の血の付着した鍵を押し付けるようにしてヤズトロモに渡す。

「悪くない話だね、のつたよ、どれくらいここから離れていればいいんだね？」

鍵を受け取りながら、ヤズトロモは人差し指を立てて、魔女の顔の前に突き出した。

「二時間じゃ」

「絶対に道具の話をして反故にするんじゃないよ！」

魔女は鋭くそういうと、いそいそと小屋から出ていった。

「さて、手取り早くこの状況を誰が説明してくれるんじゃない？」

魔女の後ろ姿を注意深く見張りながら、ヤズトロモが誰ということもななく問うた。

少年は脇腹から血を流し、気を失っているようだ。クインも仰向けのまま床に転がっている。意識があるのかどうかわからない。そして師匠は、焦点の合わない目で、半身を起こした状態で床に座っている。

「……私が説明しよう。もつとも、畏師のクインとその少年がどうしてここにいるのかはわからないが」

ふんと鼻を鳴らして、ヤズトロモは私に背を向けて、少年の脇腹の様子を調べ出した。その表情が曇ったところを見ると、傷は深刻なもののようにだった。

私は、少年に応急手当を施すヤズトロモの背中に向けて、師匠が夢に現れてから、師匠の憑代である少女に出会って小屋まで同行した話をした。そして、ザラダンが魔女の背後で画策していることを教えた。

腰に付けた小袋から取り出した包帯で少年の腹をきつく縛ったあとで、ヤズトロモは私を振り返った。

「ザラダンは受肉したダークストームとわしをぶつけようと考えたのじやろう。なかなかぞつとしない話じゃが、その恐れは除かれたと思う。この少年の勇気のおかげじゃ。鍵は少年の血に濡れ、本来の役割を果たすことができなくなつた。だが、ダークストームの手はまだこの世界に伸びておる。それを、どうするかじゃが」

ちらりと、正体をなくしてぼんやりと虚空を見つめている師匠に、ヤズトロモが険しい視線を向ける。

私には予感があった。というよりも、このことについて他に選択肢はないように思えた。

幼い「お嬢様」の姿が脳裏をよぎつた。ただ人間としてのささやかな幸せだけを願っていた、いたいけな姿。きつと、この少女は、「お嬢様」が自分の力で手に入れた幸せの中でも最大の存在だったはずだ。

「それは、できない。だめだ」  
私はヤズトロモの肩を掴んだ。

「アラゴン、お前はダークストームを憎んでいたのではなかったのか」  
「そうだ。だが、それだけに、師匠の巻き添えで「お嬢様」の子どもに

危害を加えることは許せない」

「ダークストームを顕現させないためにはそれしかない。正直に言う。わしは、ダークストームが消えたとき、心底ほつとしたものじゃ。残つたあの三人がいかに邪悪で強力な存在だったとしてもじゃ。まあ、当時は、あの三人をそれほど脅威に思うものはいなかったのも事実じゃがな。最近では「ダークストームの方がまだましだった、なぜなら一人だったから」などというバカもいるが、わしからいわせれば、当時またまた未熟だったとしても、三人がかりでなければ倒せなかったのがダークストームじゃ。また、ダークストームとて、本当は彼らの挑戦など歯牙にもかけていなかったのではないかな。それだけ、両者の間には隔絶した力の差があつたのじゃが、賭けに勝つたのは、いかなる運命のいたずらか、やつらだったというところじゃろう。それは僥倖じゃつた。おそらく二度目はない。いや、今のやつらが束になってかかれればできないわけではないのじやろうが、当のやつら同士が仲たがいでいるからな。わしやニコデマスではそもそもダークストームと戦い方が異なつておる。何かしら工夫が必要になつてくる。となれば、物質界に顕現させてはならない。受肉など以外の外。わかるな、アラゴン？おぬしにやれとは言わぬ。これは、わしがやる。何より、先ほどくたばつた古いなじみのドワーフからも、この件の後始末を頼まれたばかりじゃからな。わしが責任をもつて手を下す」  
ヤズトロモの表情が苦悶に歪んだ。門を閉じる方法をヤズトロモは知らないのがわかつた。たつた一つの方法を除いて。

「鍵自体はもう役に立たないじゃないか。だったら……」

「じゃが、「門」のある限り、扉のすぐ向こうで今回のようにダークストームはある程度動くことができる。例えば、この少女が、魔法の修行を経て、一定の魔力を得たときは、どうなる？そう、今はまだいい。おそらくはまじないを少々使えるだけだ。それに限定されてダークストームの影響も少なかった。だが、もし、この少女の耳元で執拗に囁き続ける者がいればどうなる？力が欲しくはないか？」

「だが、ダメだ。「門」を完全に閉じる方法はあるはずだ。師匠は知つ

ていたと思う。それを、何とか探すんだ」

「……しばし、待て」

言い争いに発展しかけていた我々の言い合いに割り込むように、不意に、床に半身を起こしてぼんやりと座っていた師匠だった少女が口を開いた。

「これのことは、しばし、待て。よいな」

声音が、圧倒的に異質だった。少女の口から発せられるそれは、人の発する声のように聞こえなかった。少女のようで成人した男のようでもあり、そして年老いていて赤子のようでもあった。そして、その声音自体が、硬い金属の塊を頭の中へねじ込まれ、そのまま脊髄から腰にむけて串刺しにされるかのような衝撃を私に与えた。

言葉はそこで終わり、少女は力を失って床へ倒れこんだ。

ヤズトロモを見れば、彼も同様の強い衝撃を受けたようだった。私に向けた表情は、いつもの気難しそうなしめめ面ではなく、驚きと畏怖によるものか、どこか呆けたように間延びして見えた。

「……今のは？」

知らず口に出ていた私の問いに、ヤズトロモが応じる。

「名は知らぬ。おそらくは天の王宮に鎮座します方々のどなたかであろう」

ヤズトロモが瞑目する。

「ならば、待とう。我々にできることは、実は、もう、何も無いのかもしれない」

くポート・ブラックサンドく

海へ流れ出る広々としたナマズ川の南岸から、もうもうと黒い煙が立ち上るのが見えた。船から降りたドワーフのキルデリクは、その煙を訝し気に太い眉を歪ませて見遣った。

慣れない海の船旅の後、キルデリクはポート・ブラックサンドで船から

降りた。今度は川船に乗って赤水川を遡って故郷のストーンブリッジへ向かうのだが、その前に、馴染みのフォーガの司祭のもとを訪れる予定だった。

歌う橋のたもとまで来て、その煙が、自分がこれから訪れようとしたフォーガ神殿から立ち上っているのを確認して、キルデリクは思わず駆けだした。

大勢の野次馬が荘厳な石造りの神殿の前にたむろしている。石造りの青い巨大なドーム自体が燃えることはないが、内部からどんどん煙が這い出して来る。野次馬が口にする情報の切れ端をつなぎ合わせて、キルデリクにわかったことは、白昼堂々フォーガ神殿に押し込み強盗を働こうとした者たちがいたということだった。信者の礼拝中の方が金目の物を多く脅しとれると踏んだのだろう。

多くの人だかりの中に、馴染みの司祭の顔はないかとキルデリクは見回すが、見当たらない。

「中に、子供がいるんだ！」

そう叫ぶ声が複数聞こえる。キルデリクは嫌な予感がした。自分の馴染みの司祭は、孤児を拾ってきては神殿の一角に住まわせ、教義を教えるかたわら、薄汚いポート・ブラックサンドの清掃活動などに精を出していたことを知っていたのだ。アランシア中の悪徳を集めるだけ集めて、煮詰めて濾過したようなポート・ブラックサンドには、孤児が掃いて捨てるほどいた。それらすべてを救うことは勿論できないが、それでも、キルデリクの馴染みの司祭、ポンペイウスは、孤児の救済に地道に取り組み続けているのだ。

ポンペイウスは、かつて、キルデリク、バシンとともに、三人でアランシア中を旅した。数々の冒険を体験したが、ポンペイウスの怪力と、フォーガへの真摯な信仰にもとづいた安定した精神力は、何度となく三人の危機を救ったものだ。その反面、神術をあまり使いたがらないには困ったものだった。ポンペイウスは、そのことを問われると決まって言った。

「フォーガ様に貸しを作ってるんだ」

司祭の立場で、神への貸し借りを言うのは、明らかにおかしいのだが、ポンペイウスは大真面目だった。ここ一番でフォーガの力を借りやすくするんだとポンペイウスはよく言った。その「ここ一番」には、冒険の旅の最中に結局出会うことはなかったのだが。

見つめるキルデリクの目の前で、煙をかき分けるようにして小山のような大男が神殿から飛び出してきた。両脇に、明らかに押し込み強盗だったボロキレのようになった死体を抱えている。そして身にまとうフォーガの司祭の証である赤いローブは、煤で真っ黒に変色し、挙句、布地の一部からは煙が立ち上がっていた。

その後ろをぞろぞろと、身なりが粗末な年端も行かぬ子どもたちが数珠つなぎで出てくる。みんな一様に煤で顔や着ているものを真っ黒にしているが、足取りはしつかりしている。

「みんな、いるな？」

男、ポンペイウスは、振り返って子どもたちの姿を確認すると、煙をあげているローブを脱ぎ捨てた。途端に、ローブから火柱があがった。ポンペイウスは、その様子を驚いたように見たが、すぐに自分を見ているキルデリクに気付いて笑顔を見せた。

「よう、キルデリク、久しぶりだな」

笑顔のまま、ポンペイウスはよろめいた。キルデリクは男に駆け寄ると、その巨体を支えてやった。見れば、ひどい火傷を胸から腹にかけて受けていた。大腿部から下も、皮膚が原型をとどめていないように見えた。

子どもたちが駆け寄ってきた。キルデリクたちを中心に輪を作った子どもたちは、口々にその名前を呼んだ。

「ポンペイウス様、しつかりして！」

「死んじややだ！ポンペイウスさま！」

「司祭さまが火の中から僕たちを助けてくれたんです！フォーガ様！司祭さまを助けて！」

天を仰いで祈りを捧げる子どもたちを、ポンペイウスはぼんやりと笑みを浮かべながら見つめている。

フォーガの司祭ポンペイウスは、死にかけていた。いや、肉体はすでに死んでいたに違いない。彼を生かしていたのは、子どもたちから自分へ向けられた哀切の情と、彼らを置いていくことへの申し訳なさだったろう。ポンペイウスは、団扇のような巨大な手を子どもたちの頭に優しく載せて、ほほ笑む。だが、それで精いっぱいだった。やがて、視線の焦点がなくなってきた。瞳を閉じる。

「フォーガに救済を願うのだ、ポンペイウス！借りを返してもらおうのだ！」

キルデリクがその耳元で叫ぶと、目を開いたポンペイウスは微かに顎を左右に振った。

「最後にお前の顔が見られてよかった、キルデリク。そこで、頼みがある。吾輩の子の行く末を頼みたい。生まれたばかりでな、名前も、まだ、考えてなかったんだ。母親が産まれてすぐに死んでしまっただけだ。ああ、これを、あの子に渡して欲しい」

かすれた声で、何度かつかえながら、そこまで言った後で、ポンペイウスは自分の聖印をキルデリクに渡し、再び目を閉じた。ポンペイウスの震える手が押し付けるようにして自分に渡してきた、猟犬を象ったフォーガの聖印を、キルデリクは腰の小袋に突っ込んだ。

「ポンペイウス、おい、ポンペイウス？」

キルデリクが呼びかけるが、ポンペイウスが再び目を開くことはなかった。

人々のざわめき、未だもうもうと煙をあげる周囲のざわついた空気を切り裂くように、赤ん坊の泣き声が響き渡る。

腕の中で息を引き取ったポンペイウスから、キルデリクは泣き声のする方に視線をあげる。まだ若い赤いローブを見にまもったフォーガの司祭らしい男が、困り果てたという顔で、泣く赤ん坊を抱いていた。

キルデリクは、煤まみれのポンペイウスの巖のような顎の張り詰めた顔を見下ろした。

「一体いつフォーガに借りを返してもらおうつもりじゃったんじや、お前



は」

再び視線を赤ん坊に向けたキルデリクは、ポンペイウスの亡骸を周囲の子どもたちに託して赤ん坊の方へ歩み寄った。赤ん坊を若い司祭から受け取ったキルデリクは、その軽さに驚きながら、泣き声をあげるその顔を覗き込んだ。

……迷惑なことじゃが

キルデリクは、ストーンブリッジまでの道程を思い、この赤ん坊のために乳母を雇わなくてはならないと、鈍りがちになる思考の端でぼんやりと思った。

## ♪ポンペ その4

小さな嵐が暴れたかのようなクインの小屋を後にして、ワイらはアイギナを追った。

向かう場所はわかっている。最短のルートでヤズトロモの塔を目指してワイらは足を運んだ。

月の光も届かないダークウッドの森を足元に注意しながら歩く。ワイの頭の中は、先ほどのアイギナとのやり取りを反芻することはいっぱいだった。

親方の身が案じられるのと同じく、アイギナの行方が心配だった。あの時、ワイはアイギナを傷つけたと思う。アイギナ自身も、親方の申し出の持つ重大な意味を知らないわけではなかった。そこから生まれるアイギナの苦しみを、ワイはわかっていたはずなのに、自分の悲しみや焦燥感を優先することで傷つけてしまった。そんな自分がほとほといやになったと同時に、ワイはアイギナのことを胸が張り裂けんばかりに心配した。

何としてもアイギナにもう一度会って謝りたいと強く思った。

ヤズトロモの塔に一旦着いたが、ヤズトロモはおろか、アイギナの姿もなかった。別の道に来ているのかもしれないというクインのアドバイスで、再び北へ向かって森へ入る。

やがて、意地の悪い魔女の住む小屋のあたりに差し掛かった瞬間、何か叫び声のようなものが聞こえてきた。見えてきた小屋の方から、明らかに人のものではない鳴き声のようなものが聞こえる。

小屋の汚い窓ガラスを覗くと、はたしてそこにはアイギナがいて、シェイプチェンジヤーと相対していた。

ワイがスリングで石礫を飛ばし、シェイプチェンジヤーを撃つのと同時に、クインが小屋の中に飛び込んだ。ワイもすぐに後をついて小屋に入る。アイギナがいた。だが、その表情は、これまで見たこともないほど、禍々しい雰囲気を漂わせていた。目の前で行われているクインの戦いを、薄ら笑いを浮かべながら見ている。

こんな表情をする子ではなかったと思いつながら二言三言会話を交わした。違和感が増した。明らかに目の前のアイギナは、アイギナではなかった。アイギナは、やせぎすの肢体をボロボロのような服で覆っていて、口調はぶつきらぼうで荒っぽいが、そうした表層的なところを越えて、自分自分だという強固な心の形が、表情としてにじみ出てくるようなところに魅力があった。だが、現在のアイギナには、そんな魅力を一切感じることがなかったのだ。

狭い小屋の中で行われている格闘の中で、魔女が赤く鋭く上がった小刀のようなものをするのが見えた。弾かれた様にアイギナめがけて刃を突き出すのを見たワイは、反射的にアイギナの前に身を投げ出していた。

赤い小刀のような刃がワイの腹を貫いていた。焼けるような痛み、声が漏れた。床に倒れこんだワイは、アイギナがこちらを見ていることに気付いた。突き刺された刃が、鈍く光り出すと、アイギナの鈍い金色の虹彩が、本来の澄んだ青色に徐々に変わっていくのが見えた。形のいい唇が何かを言いたげに微かに開く。

……何だって？

アイギナが何かを口にしたように思ったが、激しい痛みの中でワイの意識は混濁していく。

最後にワイが目にしたのは、呆けたようなアイギナの表情だった。

## くアイギナ その3

見えているし聞こえていた。ずっとだ。ただ、私が私ではない状態が続いた。

今の私をなんというべきだろう。魂だけの状態？だが、当の私自身は、動いて話をし、ときおりまじないも使う。では、この私は何？この、話をしてまじないをとなえている私は何？

周囲には薄暗い空間が見える。そして私は、肉体が無いのに、縛り付けられていることを感じる。何か私を拘束し、私には自由がない。見えているし聞こえているのに。

私を拘束しているものは、茫漠とした空間の奥の奥の暗がりから伸びているように見える。白い何か私を捉えているように思う。

あがく。叫ぶ。だが、そう思うだけで、実際には何も起きない。

動きたい。自由になりたい。私は私でいたい。私として存在したい。

吠えたと思う。叫んだと思う。だが、周囲は物音ひとつせず、薄暗いままだ。

疲れていた。私の何か吸い出されていくような感覚だけはわかった。

私は、消費されている。やがてこの何かを吸い尽くされた時、私はどうなるのだろう。

目を閉じてはいけないような気がした。いや、目のような意識というべきか。

今でも見えることは見える。ただ時間の流れ方がおかしいように感じる。時間の流れ自体が感じられないのだ。常にあらゆる時間の出来事が、同時に起きていくように感じられる。そのくせ、私はそのすべてを感知できない。ただ自分が意識を向けた時間に吸い寄せられて付着し、かたちを表す。そんな感じ。

ポンペの声が聞こえる。その時間に意識を向ける。

私であって私ではないものと会話をした。内容もわかった。

こいつが謝ることじゃない。

ポンペが怪我はないかと聞いている。

ポンペ自身に怪我はないのか。よかった。本当によかった。

あの時、私は悲しかった。

決めたはずだったのに。使えるものは使う。やれることはやりきる。例え、それがどんなに非道なことであっても。

でも、本当にキルデリクが死んだのかもしれないと、ポンペに気付かさされた瞬間、私は悲しくなった。

自分が、例え父や母の想いに応えなくてはならないにしても、それほどまでして生きていく価値のある存在なのか分からない。そんな私のために、父の親友でポンペの育ての親のキルデリクを死なせてしまったのかも知れないということに、私の心は押しつぶされそうになったのだ。

その瞬間、あいつが私を絡め取り、ここに縛り付けたのだ。

暗がりの向こうで、あいつはずっと、私の心が動揺して衰弱する瞬間を狙っていたのだ。

私は物心ついたときから、あいつの言葉に耳を傾けていた。まじないの使い方も、あいつが教えてくれた。最初は母に見つかからないようにこっそり使っていたが、すぐばれた。叱られ、二度と使わぬことを誓わされた。

だが、あいつはそんな誓いは守る必要がないものだと言った。ささやかな力。誰かを不幸にするのではなく、むしろ少しでも状況を変え、小さな幸せをもたらすものだ。

幼い私はその囁きを信じた。以来、母に見つかからない場所で度々まじないを使った。おかげで、逃避行の際には、何度も危機を脱することができた。だが、まじないを使うたびに、あいつの囁きは音量を増し、朗々と響くようになっていった。やがて、声だけではなく手が伸びてくるようになってきた。睡眠中、私の魂のかたちを確かめるように、舐めるように這いずり回る手を感じて目が覚めることが多くなった。あいつは、私を調査し、値踏みし、自分のものにする瞬間を執念深く待ったのだ。

その時がきたのだと思った。私は、ついに私自身をあいつに奪われたのだ。自分のしたことで自分が動揺した瞬間の隙を突かれて。いわば、自分

自身の行いの報いを受けたのだ。

悔しかった。私は私である。私は他の何者でもない。私は私なのだ。なのに、私ではない何か私が私としてポンペと会話を交わしている。

肉体はないのに、悔しさのあまり涙が出たように思った。

誰も私を助けてくれはしなかった。他でもない私自身が奪われた私を取り戻すしかないのだ。私はこのよくわからない暗がりのような場所に拘束され、自分自身がなすことをただ見ているしかできていない。

だが、突然あいつが激しく動揺した。空間が波打ち、拘束された私の魂までも大きく揺れた。あいつの心の戦慄が直に私に伝わってくる。何か私が私と、あいつが望む展開の間に立ちはだかつて妨害を、決定的な状況の変化をもたらしたことがわかった。

気付けば、ポンペが倒れていた。脇腹から血を流し、どんどん顔が真っ青に変化していく。あいつの動揺が、ポンペによるものだということがわかった。

ポンペを救わなくては。

私はそのことしか考えられなくなった。会ったばかりの肉屋の少年。無邪気で少し鈍い、そのくせお節介の頑固者。面と向かって私をなじり、そして、心の底から私を心配してくれた少年。

私には、逃避行が始まってから、いや、始まる前からも、出自の異様さの所為で同世代の友人はいなかった。これまで、慎重に父と母が、私の周囲から同世代の遊び相手を取り除いていったことは何となくわかっていった。私は、自分で言うのもなんだが、見目もよいし、受け答えもしっかりしている子どもだった。自然、私は同世代の子どもたちの間に混じ居れば、周囲から一目置かれ、皆私と仲良くしたがったのだ。だが、そうした子どもたちは、出会ってしばらくすると、波が引くように私のそばから離れていった。ある日、そうした子の一人に思い切った事情を聞いたことがあった。その子は言った。「あなた、からだ弱いんですよ。あまり私たちと遊んでいたらだめだって、あなたのお母さんが言ってたわ」当時、その事実を把握して私は烈火のごとく怒り、母に詰め寄った。だが、母は困

った顔をして、「あの子にとってもあなたにとっても、これはよかったことだったと、後でわかります」とだけ言うのだった。母の気持ちは、今ならわかる。私のからだは、弱くはないが、あいつが巣くっている。普通の人間をあいつに関わらせる害悪を思えば、私の気持ちなど些細なことなのだ。

ポンペは、事実を知っても、私を私だと見ていてくれた。だからこそ、私自身の行いに怒り、私自身の物言いをなじった。私の中のあいつではなく、ほかならぬ私をなじってくれたのだ。

今も、あんなことをした私を探して助けに来てくれたのだろう。本当にお人よし。こんなポンペだから、救わなくては。私のために命を失わせてはならない。そんなのはごめん。また、あの肉付きのいい、頬を張らせて欲しい。私の悪態に目を白黒して欲しい。

じゃあ、今の私に何ができる？

どうしたらいい？どうしたら……

万事に休した私は、生まれて初めて、天の王宮にすむという神々に祈った。

神々の名前など、きちんと知らなかった。もちろん、その教義などこれっぽっちも知らない。だからこそ、私は必死にただ祈った。神々の数がどれほどかは知らない。だからとにかく全員に祈った。

祈りが通じたのだろうか。再び、私が拘束されている空間がざわめく様に揺れ動いた。揺れ動きながら、空間がガラスの欠片のように細かく固まり、光りながら散って落ちていく。やがて降り積もったかけらがまとまって、目もくらむような大きな光となって周囲を煌々と照らし出した。照らし出された空間の向こうに薄い膜のようなものが見える。そのさらに向こうに、何かが動いているのが見えた。慌ただしく動くそれは、人影に見える。人影が不意に光の中に姿をさらした。

私は、息を呑んだ。

人影は、ポンペだったのだ。

目を覚ましたとき、ワイはかたわらに何かの気配を感じていた。何か凶悪な獣がこちらを襲う機会を狙っているときのような。見張られていて、いつでも向こうが自由に飛び掛かってこられる間合いに自分がいる。恐怖で体が強張る。

そして、いまさらながら、ここはどこだ。さつき、ワイは魔女の小屋でアイギナを守るために、魔女に刺された。

ひよっとしたら死んだのだろうか。ここは、死んだら行く、えーと、なんやっただけ。とにかく、死んだ魂が行く場所、神様がいる場所なんじゃないだろうか。だが、周囲は薄暗く、かろうじて自分の手足が判別できる程度の明るさしかなかった。

……安心しろ、お前はまだ死んではいない

地の底から響いてきたかのような、暗くかすれた声がワイの耳を打った。ぞつとしながら、声のした方を振り返ると、そこには、つば広の帽子をかぶった、白い髭を胸元に垂らした年寄りが立っていた。

……咄嗟に刃の前に身を投げ出してアイギナを救った。素晴らしい勇気だ

言う程賞賛の気持ちはないというのがよくわかる平板な声で老人が言いながら、ワイに手を伸ばしてくる。

……素晴らしい勇者に祝福を与えたい

何かいやな予感がした。絶対に触られてはいけない感じがした。場所の雰囲気もおかしいし、目の前の老人は、もつと胡乱で怪しい。だが、この老人から逃れられない、何か言うことを聞かなくてはならないような、変な強制力、圧力のようなものをワイは感じていた。不意に、ワイの胸元に光るものがあることに気付いた。それまで気にも留めていなかった、出発の前の日に親方がお守りにと渡してくれた猟犬を象ったペンダントだった。

次の瞬間、ペンダント全体が煌々と光り出した。

周囲の様子が照らし出されると同時に、老人が憎々し気に何かをつぶやきながら眩しそうに自分の顔を手で覆う。老人の視界から逃れた途端に、ワイをそれまで捉えていた変な圧力が消えた。

……ポンペ？

アイギナの声が出た。ペンダントからの明かりを頼りに、今いる空間の奥の方まで望見する。すると、奥の暗がりには、何かガラスに光が反射するのように見える空間があった。

「アイギナか？」

ワイは大きな声で呼びかけた。

……ポンペ！

アイギナの声がそれに応じた。光の反射する空間目指して、ワイは走った。

ちらちらと光を反射するものは、凹凸のある薄い膜が張られているような、何かしらガラスのような硬質な物質でできた覆いのようなものだった。その向こうに座っているアイギナの姿が見えた。

アイギナはワイが見えているようだ。ワイを見て、ほほ笑む。それは先ほど再会したアイギナとは異なり、真正正銘のアイギナだった。

うれしくなったワイは、背後に老人が迫っていることに気付いていなかった。

老人の手が、ワイの肩をがっしりと掴んでいた。悲鳴をあげたワイの耳元で老人は滴るような声を漏らした。

……さあ、願うのだ。アイギナのもとへ行きたいのだろうか？この境界を越えるために、扉を開け、今、すぐに！

肩を掴む老人の手のひらから染みわたるように、ワイの心には、その言う通りにしなくてはならないという強迫感が生まれていった。頭の中がぼんやりして、老人の言葉だけが頭の中で鳴り響く。

……ポンペ！

アイギナの声が耳元で弾ける。正気を取り戻したワイは、肩に置かれた老人の手を振り切って逃げだす。

……どこへ行く？逃げ場はないぞ

老人の手が再びワイを捉えようとした瞬間だった。

ペンダントが激しく光り出し、アイギナとワイたちを隔てている膜のようなもの、呼応するように目をそらしたくなるほどの輝きで明滅する。次の瞬間、ペンダントが内から弾けるようにして光った。周囲が昼間のように明るくなり、その閃光はワイの目を焼いた。

……ううおおうううう

老人がうめき声をあげ、ワイを掴んで捕らえようとした手を離した。一瞬視界を失ったワイは、手を床について、あたふたと四つん這いで逃げ出した。

どんと、何かに頭がぶつかった。その頭に誰かの手が置かれるのがわかった。視界はまだ戻らない。その手は老人の筋張った硬く鋭い指でできたものではなく、皮が厚くごつごつしているが温かく優しく、そして、懐かしかった。

「親方？」

目を見開くと、回復した視界の先に、表面が白く発光しているかのような親方が立っていた。片方の手に大ぶりの斧を持っていて、笑っていた。滅多に見られない程の、満面の笑みだ。

……ポンペ、よくがんばったな

親方はワイの頭の上の手をぐりぐりと荒っぽくこねくり回した。

……ここから先は、ワシたちが、ダークストームの相手をする。お前は、扉を閉じることに集中するんじゃないや

親方が何を言っているのかよくわからないながらも、ワイは条件反射で頷いていた。ふと、親方の向こうに二人の人影が見えた。

二人とも親方と同じく表面が青白く光って見えた。

……娘が、アイギナが世話になった、ありがとう

長い髪を頭の後ろで結わえた目鼻立ちのくつきりとした背の高い男が、そういつてワイに軽く頭を下げた。

「アイギナのお父さん？死んではるんやろ？」

アイギナの父は、口の端を吊り上げるようにして笑ってから、ワイに片目をつむってみせ、すらりと腰に下げた長剣を鞘から引き抜く。

……ポンペイウス、神がこの状態を継続できる時間は？

アイギナの父、バシンにポンペイウスと呼ばれたもう一人の人影が、ワイの視界に入ってきた。仰ぎ見るような大男が立っていた。横幅も小山のように雄大だった。その巨体を、真つ赤なローブで包みこみ、悠然とした雰囲気であっている。

……大きくなつたな、見違えたぞ

大きな丸い目で、まじまじとワイを見つめながら、ポンペイウスは良く通る野太い声でそう言った。どこかであったのだからとワイは思ったが、皆目見当もつかなかった。

……わからんか、まあ、そうだろうな

ポンペイウスはそう言って、からからと笑った。

……時間はわからん、吾輩は神そのものではないからな。ただ、急ぐべきだとは思う

笑い終えると、ポンペイウスはバシンにそう言って、ワイの手を引いて歩き出した。

その背後で、ダークストームが手を伸ばして、何かをつぶやく。

……なぜだ？

次の瞬間には慌てたように一度手を引き絞り、再び手を体の前に伸ばすことを繰り返す。だが、ダークストームの望む何かは起きないままのようだった。

……どうした、得意の魔法が使えないのか？

その声をかけながら、親方の戦斧が伸ばしたままのダークストームの右手首を刎ね飛ばした。

ワイは、血飛沫があたり、ダークストームが悲鳴をあげることを想像して、思わず目をつぶった。

だが、手首のあった部分が消えただけで、血飛沫はあがらず、ダークストームも親方を睨みつけるだけだった。

……ポンペイウスの「貸し」がこれほどだったとはな

バシンが軽やかなステップでダークストームの胸元に剣を突き立てる。それをよけずに受けたダークストームは、さらなる怒りを両目に宿して、叫んだ。

……神の力かッ

そして、手首のなくなった右手と左手で、自分の胸に刃を突き立てたままのバシンに掴みかかった。

……おのれっ、おのれっ

むしゃぶりつく様にダークストームはバシンの上半身に張り付いて叫び散らした。

……我が我であることを、他の誰にもやめさせることはできないッ。そして、他の誰にも決めさせることはできないッ。

ダークストームの筋張った肢体が、瘡に架かったように震える。

……我は自らの意志で、この世界に降り立ち、自らの意志で、我になったのだ。我はけっして神々が手慰みに持えたおもちやではないッ。

叫びは悲鳴のように甲高くなっていく。

……我は、我のためだけに、この世界を食らい、味わい、咀嚼して排泄する。それこそが、我が我であることの証だからだ！

傲慢で身勝手な主張をわめきながら、ダークストームは、バシンから離れた。

……儂はこの世界の有り様が不思議でならなかった。神々がいる。そして我等定命の者がいる。

バシンから離れたダークストームはよろめきながら、歩き出す。

……その差はなぜ生じるのか？我々は親から生じ、土に還る。神は何から生じ、どこに還る？いや、奴らには還る場所はない。やつらは、ただそこに在るのみ。

そこまで言うと、ダークストームは、体重を感じさせないような浮遊感のある歩みを一旦止めた。

……その意味は何か。なぜ、我等に干渉する？なぜ、気まぐれに我等を

弄ぶ？……我等は、奴らの遊具の駒などではない！断じて！

ぐいと顎をあげたダークストームは、それまでのどこか独り言のようなかすれた声音ではない、大きな声をあげた。

……儂は、高みの見物をしゃれ込み、気まぐれに手を伸ばして、我等を翻弄する、奴らの居る場所へたどり着き、その場所から引きずり下ろし、奴らにこの汚辱にまみれた世界を、存分に味わわせてやるのだ！そして、そのふざけた趣味を悔い改めさせてやるのだ！

そこまで言うと、どこを見ているのか定かならぬうつろな視線を空間に這わせながら、再びふらふらとダークストームは歩き出した。

逃がしはせぬとばかりに、親方の戦斧がダークストームの足を難いだ。両の足首が刎ね飛び、ダークストームは転倒した。

……我は、神を許すことはできぬッ！神を根絶やしにすることを願うッ！我が我である尊厳を奪うものどもを、ことごとく根絶やしにッ！

親方の戦斧が倒れこんでわめきちらすダークストームの首を刎ねた。だが、刎ねられた首は、軽やかに着地するように首を下にして立った。首だけになったダークストームは、なおも口を開いて声を発する。

……神はそもそも成り立ちが我等とは異なる……奴らを構成しているものはなんだ？奴らを滅するためには、何が必要だったのだ？……何が、なに……が……

言葉が途絶えたと思うと、首だけのダークストームは、霧が風に吹き飛ばされるように、どんどん薄くなり、やがて消えてしまっていた。

……ダークストームは消滅したわけではない。

ポンペイウスがワイの手を引きながら言う。

……ここは、お前の血がロガーンの欠片と交じり合って到達した異界であり、そこに所属する幽体そのものを滅する力は我等にはない。その力があるとするれば、ダークストームも言うように、存在の有り様がそもそも違う神の力だけだ。とはいえ、吾輩の「貸し」はそこまでではなかったらしい。

凹凸のある、薄いガラスのような膜の前まで来ると、ポンペイウスが、

ワイの手を離した。

……フォーガ様がかなえてくださったのは、この異界への我等の変位。そして、ダークストームの一次的な無力化。我ながら、神に「貸し」を作ったと冗談ながら思っていたが、今回の件は「貸し」云々を抜きにしても、天の王宮のお歴々にとつて、見過ごす気はなかったようだ

何を言われているのかよくわからなかった。ワイはとにかく目の前の膜の向こう側に行きたくて落ち着かなかった。相変わらず、アイギナの顔が見える。彼女も、ワイを心配そうに見つめている。

……お願いがある

ポンペイウスは、ワイの顔を覗き込んだ。厳つい顔のように見えて、目元に愛嬌がある。

「ワイ、何をすればいい？」

……ポンペイウスにお願いしたいことは、内から扉を閉めること

ポンペイウスの言葉は、膜の向こうのアイギナにも聞こえているようだ。こちらを見る表情が不安そうなものになる。

「ダークストームは、自分が自分であり続けるために、アイギナがアイギナである権利を奪おうとした。ワイは、そんな奴、絶対に許さん」

……だからこそ、ダークストームは、悪なのだ。見事なまでに悪だ。天の王宮に住む神々にすら名前が知られている。人としてはありえないくらい、素晴らしいほどの悪だ。

褒めているのかけなしているのかよくわからんと思つたが、とにかくダークストームが悪いヤツだということは神様も認めているということがわかった。

「それと、門ってなんや？」

……門は、異界と異界をつなぐ存在だ

「色々よくわからんけど、とにかく、今はワイがここの出入り口を戸締りすればいいってことでん」

……そうだ。ダークストームが飛び散った自分を集めて象られる前に扉を閉じたい。

そのポンペイウスの言葉を待っていたように、ゆらりと空間が揺らいだ。

さつきダークストームが話しかけてきたときに感じた、暗くおぞましい雰囲気周囲に漂い出す。

……時間があまりなさそうだ。フォーガ様がダークストームをいつまで無力化していただけるのかもわからないし、我々自体もここにいつまでいられるかわからない。すぐにとりかかろう。

ポンペイウスに急かされるようにして、ワイはアイギナの姿が見える膜の前に立たされた。

……先ほど、ダークストームは、自分が開いた異界であるアイギナの居る場所へ戻ろうとし、ポンペイウスを利用しようとした。ロガーンの欠片に血を吸わせたポンペイウスは、鍵に新たな情報を上書きした存在であり、この異界から外へ渡ることを可能にする唯一の存在になったのだ。そして同じく、この異界が他の世界へつながる扉を自分の意志で閉じることが出来る存在でもある。

噛んで含めるように、ゆつくりと言葉を紡ぐポンペイウスに、ワイは少々焦りを感じていた。さつきからおぞましい雰囲気はどんどん強まってきた。膜の向こうのアイギナも、落ち着かないようで、いらいらと同じ場所をぐるぐると歩き回っている。

……アイギナにもお願いがある。扉を閉めたポンペイウスは、最悪この異界にダークストームとともに閉じ込められてしまう。そうすれば、扉を閉じても意味がない。この異界でポンペイウスがダークストームから与えられる苦痛は、おそらく再び扉を開いてしまいかねないものだろう。アイギナには、そちらから、ポンペイウスを引っ張り出してもらいたい。

アイギナが、雲ったガラスのような膜の向こう側に張り付いた。

……どうすれば、いいの？

ポンペイウスはアイギナの質問に答えようとした。だが、動きが不自然に固まってしまっていた。ふと、親方たちの方を見たワイは、親方やアイギナのお父さんも同じ状況であることを確認した。

ぞくぞくと背筋に寒気が走る。目の前の空気がよどみ、何か影のようなものが人の形に固まろうとうごめくのが見えた。その影がやがて、ダークストームの形に近づいてくるのを、ワイは戦慄しながら眺めるしかできなかった。

どこからどう見てもダークストームにしか見えないほど、影がくつきりと人の像を結んだ瞬間、ワイの胸元の猟犬のペンダントがキラリと光を放って辺りを照らした。すると、影は霧散し、途端に、ポンペイウスが目をしばたかかせて、不思議そうに周囲を見回す。

……どこまで話をしたかな

「アイギナがワイを引っ張り出すところまで。でも、ダークストームがもとに戻ろうとしているようだし、みんなも動きが止まってたんやで」

……そうか。本当に時間がないようだ。扉は自分でイメージして欲しい。何でもいい。扉状のものを思い浮かべれば、それが現れる。現れたら、閉める。片開きでも両開きでも、引き戸でも、どんなかたちでもいい。とにかくイメージし、現れたら閉める。その際、おそらくは大きな衝撃に襲われると思うが、集中してイメージを切らさないようにして欲しい。

ワイは頷くと、早速扉のイメージをはじめた。親方の肉屋の勝手口が思い浮かんだ。板の引き戸。つかい棒で戸締りする素朴な扉だ。

……アイギナは、ポンペが扉を閉めるのに合わせて、強くポンペをそちらへ呼んで欲しい。引っ張り上げるといイメージがいい。釣り針で吊り上げているイメージでいいと思う。できれば、ポンペもアイギナのもとに向かう自分をイメージして欲しい。

肉屋の勝手口は、ワイの目の前にうすぼんやりと現れた。ポンペイウスにもアイギナにもそれは見えていないようだった。

……アイギナは、母親がロガーンの欠片へ提供した情報と同じ情報の保持者だ。半分幽体のポンペは、実はこの異界からもやがて排除されてしまいかもしれない異物だ。その異界自体が異物を排泄しようとする機能と、

かつて情報を書き入れた存在による操作の両方から、ポンペを救えるかもされない。ただし、ポンペが無事物質界へ戻れる確率がどれくらいかは、正直わからない。

「扉は見えてきたで。これを閉めるといいでんな？」

ワイが声をかけると、アイギナが両手の指を絡めて目を閉じて頭を下げるのが見えた。

……最後に、ポンペ、吾輩はお前に会えてうれしかった。キルデリクから教えられ、あわただしくここまでやってきたが、立派になったな。父としてうれしく思う。お前の心にある誇りを忘れず、これからも精進せよ。自分の道を、進むのだ。フォーガ様はお前と共にある。

ワイの集中は乱れた。

「え？お父さん？ワイの？そうなん？え、え、じゃあ、死んでるの？あれ、じゃ、親方もってこと？」

……その通り、ワシはすでに死んでおる。だが、今回のこととは関係なく、ワシはいずれ近いうちに死んだようだ。だから、気に病むなよ。ワシはワシらしく戦いのさなかに死ねた。それが何よりうれしい。そして、ワシは、今回のように、いつでもお前を見守っている。だから、安心して、最善を尽くせ

気付けば親方がかたわらに立っていた。アイギナのお父さんもいる。親方がワイの肩に手を置いた。親方が死んだという事実を知っても、思ったほど動揺していなかった。死んだ当の本人が、悪い死にざまではなかったというのだ。残されたワイらが、それを悲しんだり悔んだりは無かった。そう思うと、心が落ち着いた。そして何より、肩に置かれた堅い節くれたった親方のいつもの手の感触が、ワイにはうれしかったのだ。

ワイは大きくうなずくと、再び意識を集中し、目の前の扉を閉じようとする。

すると、ひゅうひゅうと周囲に大きな風が起こった。風はワイを吹き飛ばそうとするように、猛烈な勢いでぶつかってきた。

風の音の端々に、ダークストームの音が混じる。



……神の力は消えた……儂を拘束するものは何もない……

ワイは思わず目を見開いていた。小さな嵐が目の前で吹き荒れていた。ぐるぐると黒い雲がとぐろを巻き、小さな稲妻が周囲を覆う。恐ろしい音を立てて風が吹き荒れる。

……小僧、儂を連れてアイギナのもとへ渡るのだ

昏い嵐が、遠くから響いてくるような声でワイに命令した。

親方たちはどうしたのだろうと、ワイは周囲を忙しく見回した。

「……ああ」

先ほど、首だけになったダークストームが風に吹かれた霧の如く消えていったように、親方たちは、体の大部分が薄くなって霧のように空中に浮かんでいた。皆、一様にワイの方を見つめているが、その表情は不思議と穏やかだった。さつきから時間のことを気にしていたのは、このことだったのだろう。親方たちがここに居ることができるとは、このことだろうか。ここは、ワイがやりきるところを見守ることだけしかできなくなってしまったようだったが、その表情は何も心配しているようではなかった。ワイは信頼されているのだ。そう思ったワイは、肚を決めた。

扉のイメージを心の中に象る作業を再開したワイは、必死にその扉を閉じようとする。だが、鋭く重い風に横つ面を張られて吹っ飛んだ段階で、集中が切れた。

……残念ながら、ここはお前が門として開いた異界……

吹っ飛んだ先で転がったワイの右手に小さい竜巻がまとわりついてくる。竜巻の回転はすさまじく速く、来ていたシャツの袖をあつという間に切り刻み、さらにワイの肌を鋭く裂いていった。

思わず悲鳴をあげるワイをあざ笑いながら、ダークストームは言葉が続ける。

……このままここで儂と永久に戯れ続けるか？全身を切り刻まれて、血まみれになって死に絶えても、死ぬことは無い。風が吹けば甦り、お前はまた儂に切り刻まれる。儂はそれでもかまわん。だが、それは嫌だろう？この扉を開いて、アイギナに会いたくはないか。物質界へ帰りたくない

か？

小さい竜巻は、ワイのシャツと肌を切り裂きながら、腕から胸元へ上がってきた。痛みと恐怖でワイは泣き叫んだ。こんな苦痛は耐えられないと思っただ。

……やめて！もう、やめて！

アイギナの嘆きが伝わってきた。だがワイの姿は見えても、こちらの異界に存在していないアイギナにできることはない。

ワイの胸元に至って、不意に、竜巻の動きが止まった。

……フオーガめッ

胸にかけたペンダントが、今度はキラキラと赤く光っていた。ペンダントに触れた瞬間、竜巻は霧散し、ワイは、人心地ついた。ダークストームである昏い嵐の勢いが弱まった。

好機到来だった。ぎゅっと目を閉じた。皮膚が裂け血の流れる右手が焼けるように熱い。その熱が脳みその中に溶け込んでくるような感覚があった。それは怒りだった。理不尽な暴力への怒り。人々の尊厳を踏みつける悪への怒り。それを象徴するダークストームへの怒り。

「アイギナっ」

ワイの呼びかけに、アイギナの意識が応えた感覚があった。さつき言われた様に、アイギナがワイを引っ張ってくれようことを信じて、ワイは親方の肉屋の勝手口の粗末な引き戸を勢いよく閉じて、つかい棒をかけるイメージを明確に脳裏に描いた。

……ならん！

ダークストームの呻くような声が聞こえた。ごうごうと風鳴りが耳元のかたわらを掠めて吹き去っていく。

……儂は、ゆるさんぞ！神の理不尽を、出鱈目を！絶対にッ……

ダークストームの声が急速に遠ざかっていくと同時に、何か大きな力に身体すべてを一気に運ばれる感覚があった。そのまま激しい圧迫感が胸の上にのしかかってきて、ワイは呻いた。

頭の片隅にアイギナがワイを呼ぶ感覚が現れては消えた。ずぶずぶと身

体が何かに沈んでいく感覚の中、親方たちが耳元でワイを励ましているような気がした。むかむかとした気持ちの悪い圧迫感の中、ワイは引き続き何かに引きずられ、運はれていくのがわかった。目は怖くて開けられなかった。そこに何がいて、どんな空間が広がっているのか、想像するだけに恐ろしくてならなかった。さつきポンペイウスが言ったように、目を閉じたままのワイは、ただアイギナの青く澄んだ瞳のことだけをイメージし続けた。

どれくらい時間が経ったのだろうか。不意に圧迫感が薄れ、浮揚するような感覚に包まれ、思わずワイは目を開いていた。

「……いてて」

頭がぼんやりする暇もなく、覚醒した途端に脇腹がひどく痛んだ。

思わず呻き声をあげると、そこに、何かが飛び掛かってきた。

先ほどまでのダークストームのやり取りから、ワイは身構えようとしたが、飛び掛かってきたそれは、あまりに素早く、そして躊躇がなかった。

「ポンペっ」

あつという間にワイの頭の後ろに手が回され、先ほどまでイメージし続けていたのと同じ、薄い青色の綺麗な虹彩がワイの視界いっぱい広がった。

「……アイギナ」

ようやく実感がわいた。あれは、本当にあったことだったのだ。異界で出会った、親方たち、そして、ダークストーム。

お互いの鼻の先と先がほとんどこすれあうほど近いアイギナの笑顔。

何かとてつもないことをやり遂げたような気もするし、おかしな夢を見ていただけのようない気もする。

アイギナの顔を見て安心したのか、体の奥底からにじみ出てくるような脱力感がワイを襲った。本当にとっても疲れていた。アイギナにぼんやりと笑顔を返ししながら、ワイは、瞼が閉じようとするのに耐えられなくなっていた。

眠りは優しく、そして唐突にワイに訪れた。最後にワイが思ったのは、

このままアイギナがワイを抱きかかえたままでは、非常に重いだろうなという心配だった。

## アイギナ 回想

その後、ポンペが再び昏倒したので、魔法の粗末な小屋の中は、途端に慌ただしくなった。

ヤズトロモがポンペの口を無理やり開いて何かのポーションを流し込み、クインがポンペを背負ってストーンブリッジ目指してダークウッドの森を突っ切ることになった。途中、フィッシュマンやケンタウロスの助けを借りたりしながら、信じられない速さでストーンブリッジに運び込まれた。ポンペは、すぐに司祭によつて治癒を施された。

私は後からストーンブリッジに到着したので、結局ポンペを救った神が何なのか最後まで知らず終いだったが、神や司祭のことを、また大いに見直すことになった。

「門」となつて異界を開いた存在は、大概精神や健康を害するものだが、そうした兆候がポンペにないことを、アラゴンは非常に驚いていた。ヤズトロモが言うには、聖印経由でフォーガが何かしら影響を及ぼしていた可能性があるのではないかとのことだった。ヤズトロモ自身は、この件について、キルデリクに引っぱり出されたものの、何一つ主体的に動くことができないままに決着してしまったことについて、かなり本意に感じているようだった。

もつともヤズトロモは、ストーンブリッジまで私といっしょに来てくれて、ポンペの健康が回復へ向かう頃まで、状況を見守るために同地にとどまった。また、今回の騒動の重要なアイテムである、ロガーンの欠片である鍵は、ポンペが閉じた異界が再び開くことがないように、ヤズトロモが厳重に管理してくれることになった。私のときとは異なり、そもそもその共通情報がなく、魔法のセンスもないポンペを通じてダークストームが物質界に影響を及ぼすことはできないようだ、ヤズトロモは言っていた。そ

してポンペの「門」はポンペの死によって完全に閉じられるのだから、この状況がこのまま続くのであれば、ポンペは自分の人生を最後まで全力で過ごすだけでいいのだという。

塔へ帰る前、ヤズトロモは母に面会し、今回の出来ごとの大本であるダークストームの計画などについて、アラゴンを交えて情報の収集と意見交換を行った。

どんどん健康を回復していくポンペとは反対に、母の健康は最後まで回復しなかった。

そんな母にアラゴンは、かいがいしくつくした。幼い頃からずっと共に暮らしたアラゴンは、母にとっては、父や兄のようでもあり、アラゴンと過ごした最晩年の時間は、母の人生の中で最も穏やかなものになったと思う。

事件の二年後、母が同地で息を引き取った時、傍らに居たのは、私とアラゴンだった。アラゴンは、息を引き取る前の母に、「長生きすること」を新たに約束させられていた。ダークウッドの森に帰ったアラゴンは、再び「大魔導師アラゴン」の看板を掲げて、健康に留意しながら隠遁の生活を送っているようだ。

ちなみに、アラゴンの持っていた祖父由来の魔法の品である琥珀の眼は、あの魔女が色々と難癖をつけてアラゴンから奪っていったという。結局ヤズトロモが魔女との約束を反故にしまった腹いせだったようだが、アラゴンとしては、特段惜しいとも思っていないようだ。

キルデリクの葬儀は質素だったが、ジリブランの肝いりだったので、ストーンブリッジを代表する御歴々が顔をそろえたものになった。葬儀の間、ポンペはずっと泣いていた。キルデリクの亡骸を埋葬するときは一際大きな声で泣きわめいた。そんな姿に、皆ももらい泣きしていたが、私は泣けなかった。ここで泣いたら、違うと思っていた。もしあの時、キルデリクが囨をしなければ、多くの人たちに死に目を看取ってもらうような、穏やかな死が彼には約束されていたはずだった。

だがキルデリクは、父との友情のために、私を助けようと行動した。そ

の雄々しい精神に敬意を表し、その生きざまに感謝するには、私は泣いてはいけなかったのだ。これからの私自身の生きざままで、私はキルデリクの恩義に一生をかけてこたえていくのだ。その決意に涙は不要だった。

さて、ポンペについてだ。

ポンペはキルデリクの葬儀が済み、傷が癒えるとすぐにストーンブリッジを出た。キルデリクの伝手で、丁稚奉公をしながら肉屋になるための修行をするためだった。

「絶対、立派な肉屋になって戻ってくるで」

「変なものを食べたり飲んだりしちやダメ、わかった？」

「おう！」

ストーンブリッジを出発するポンペを見送りに行った私のかけた言葉は、さつき慌ただしくここを出ていったときにかけたものとあまり変わらない。というか、同じだったように思う。ポンペの方も同じように、いつもと変わらない様子で、意気揚々と旅立っていった。

ポンペには、以来十年近く会うことはなかった。

私は、母を看取った後、元々興味のあった薬草師になることを目指して、ストーンブリッジを出た。あつちに薬草に詳しいガラナの司祭がいると聞けば訪ねて行って神殿に住み込みで働いたこともあるし、こつちに本草学の泰斗のエルフがいると聞けば、押しかけて行って教えを請うたこともあった。もともと持っていた、相手の体調を瞬時に診たてる能力が、当然というか、かなり役にたった。そして、年月を経るにつれて経験も増し、それなりに薬草師としてやっていける自信もついたころ、各地を放浪しながら薬草を採取して歩く仲間の薬草師から、懐かしいストーンブリッジの様子を聞いた。

キルデリクの肉屋が、新しい人物によって再開するらしい。その店の開店には、キルデリクに親しかったドワーフたちが手を貸し、ダークウッドの森の住人たちもいくらか関わっているらしい、と。

いてもたってもいられなくなり、私はストーンブリッジへ帰った。

久しぶりのストーンブリッジにたどり着いたのは、まだ夜も明けきっていない早朝だった。気持ち之急いで、夜通し歩き続けた私は、朝霧に包まれた石造りの家々の中を、目当ての肉屋目指して足を速めた。

昔と変わらぬ場所に肉屋があった。鎧戸が開められており、内部から人の気配はしない。まだ開きそうにはないと思ひ、私は道の傍らの何かの木の下に腰を下ろした。

閉じた鎧戸を見ている内に、なぜか腹が立ってきた。

そういえば、なんでこんなに焦って昼夜ぶつ通しで歩き続けて来てしまったのだろうか。こんなに苦勞してきた私を迎えるでもなく、朝霧の外に待たせておくのはどうしてだとか。理不尽な怒りがふつふつと胸の内を沸いて出てくるのを止めることができなくなった。普通に考えれば、私の怒りは的外れで自分勝手な単なる我儘だったのだが、私は、ポンペが相手だと思つと、どうしても理不尽で極端な思考になってしまうようだった。

切り株から腰をあげた私は、店の勝手口に戻った。引き戸の粗末な板の扉は昔のままだった。ぐいと横に引くと、つかい棒で止められていて扉は開かなかった。

怒りにかられた私は、しばらくがたがたと音を鳴らして引き戸を引き続けた。どたどたと中から音がする。何かを蹴とばしたのだろうか、焼き物の割れる音がして、不意に板の引き戸が開いた。

大きな目を、さらに丸く見開いて、そこにポンペが立っていた。

見上げるような大男になっている。でも、まるまるとした血色のいい頬や、人懐こい丸い目は、ポンペだ。そう、私が見誤るはずがない。

「えーと、どちらさんで？」

だが、ポンペはそうではなかったようだ。いや、これは、私がいかに綺麗に成長してしまったからだろうと、好意的に解釈すると、ぱちくりと目をしばたかせるポンペのふつくとした頬に手を添えて、私は言った。

「今度は、ゴンチョンなんて言わないでよ」

ぐいと頬をつねる。久々にポンペの頬の感触を味わう私に、ポンペが痛みをこらえて、変に甲高い声をあげた。

「アイギナか！見違えたでー」

夜が完全にあけようとしていた。グラタンカがその姿を見せるや否や朝霧が退き、すっかり晴れ上がった青い澄み切った空が広がった。

「アタシがお客様第一号つてことで、いいわよね」

頬から手を放しながら、私はポンペに約束させた。

ポンペは、「おう、約束や。真つ先に好きなものを選ばせたる」と胸を

反らすと、眠りを途中で妨げられたからだろうか、一際大きなあくびをして見せた。昼夜問わず歩き通しだった私もつられてあくびが出た。

それを二人で笑った。笑いは止まらず、二人は笑い続け、やがて涙が出て、脇腹が痛くなった。

ひとしきり笑い終えた後、私はポンペが店を開けるのを手伝い、一通り準備ができたと思つた段階で、何食わぬ顔で店の前に立った。ちらほらと懐かしい見知つた顔が集まつてきて、ポンペが店の奥から品物を並べ出すのを見守つた。

「お待たせしましたでんなー。ポンペの肉屋、只今開店でまんねん」

ポンペが宣言すると、見守つていた人々が店の前に集まつた。

「えーと、皆さんにお伝えせなあきまへん。この店のお客様第一号は、アイギナと決めてまんねん」

品物を前にした人々にポンペがそう言うと、私は後ろからポンペの目の前に押し出された。

「さあ、どれでもアイギナの好きなものを選んでええ。むろん、お代はちゃんといただきますけど」

片目をつむつてみせるポンペに、私は真つ先に目に付いた腸詰を指さした。それはあの日、キルデリクが私と母へポンペを使いにつけて恵んでくれた腸詰と瓜二つで、とても美味しそうに見えた。

こうして私は、ポンペの肉屋のお客様第一号になり、その品物を食べた初めての人間になった。ポンペは、約束を守つたのだ。

彼が約束を違えたことは、どんな些細なことであっても、あれから一度もない。

だから、今度の旅も、きっと、何事もなかったようにして、私のもとへ帰ってくるだろう。

そう、間違いなく笑顔で。

## 【蛇足で補足】

我ながら、ひどい思い付き設定を次々登場させてしまい、皆様を混乱させてしまったと思います。独自の設定や世界観に関わる部分は、本文中で端的に説明され、さらには読み手にきちんと伝わる必要があります。今回、雰囲気だけで私が作り出した諸々の設定は、そもそもそれ自体が破綻気味であることもありですが、内容を読みづらくさせるなど、読み物としての有り様を決定的に破綻させてしまっているように思えます。こんな寝言みたいな内容を読ませて、貴重な時間を奪うんじゃないよねー！と思われるかと思いますが。すいません。反省していますので、少しだけ蛇足で補足をさせていただきます。

## ↳異界と鍵↳

幽界や魔界など、タイタン世界には物質界とは異なる世界が存在し、それが世界観に重層的な魅力を与えています。ですが、そうした異界を物質界の人間が訪問する方法は、あまりないようです。バルサスとザラダンがカネルウオートにこだわり、異界の存在であるガンジーやソークの招へいに血道をあげたのは、その行き来に絶望的な困難が伴うからだということなんだろうと思います。

そして『トロール牙峠戦争』を読んだ私は、襲い来る脅威を、異なる世界に封印するという方法で除くということを意識づけられましたし、ますます異界と物質界、もしくは異界同士を行き来するということは難しいのだろうと思うに至りました。

ですが、どうも神は違うようです。神に近い高位の存在も違うようです。

また、異界のものを召喚する方法に、血肉に関わるものが多いということもなんとなく気になりました。異界同士の境界を超えるとき必要なエネルギーや、神に関わる（人間であればロガーンの欠片である部分）要素、もしくはそれを補うものが触媒や生贄なのではないかと考えました。後者は、それによって境界にかかっているロックを解除できるというイメージ

です。いずれにせよ、生身の人間が異界へそのまま行つて帰ってきたり、異界それぞれの法則に規定された存在が別の異界へそのままの在り方で移動することはほとんどできないだろうと考えました。

この話の中で、ダークストームは自らを異界へ変位（自我を持ったまま異界へと移る事と考えてください）させようと、異界の境界のロックを解除するため、異界を渡る能力を持つ神（例えばロガーン）の欠片を寄せ集めて「鍵」をつくり出します。ただし、ロック解除後、そのゲートを通過するためには、鍵（ロガーンの欠片）に情報を保存した血と同じ情報を持った者でなければ通行できないとしました。話の中で、アラゴンが幼いフレダに鍵を突き刺して血を纏わせるシーンがそれです。これで、フレダの血（ダークストーム家の血という情報）が登録されることで、ダークストームはゲートを通過したのです。

ただし、変位していく異界は、登録された情報によって、各自異なるということになりました。それぞれの異界への干渉が難しいということとはなんとなくイメージ（ザラダンなどはそれで安全地帯に居るということなどではないでしょうか）を持っていました。

話の中でダークストームは、ポンペの情報が鍵に上書きされたことで、ポンペの変位に巻き込まれてダークストーム家の血の情報で変位した異界から弾き出されてしまいます。ダークストーム家の変位する異界には、閉じ込めたはずのアイギナだけが残され、自らはポンペの変位した異界に移ってしまつたのです。

自分でも何を言っているのか甚だ怪しくなってきたのでやめますが、タイタン世界の異界関係は、まだまだたくさん秘密を残していると思っております（私が知らないだけだったらすいません）。

今回、私が寝言のような話を思いついたのも、そうした重層的なタイタン世界について思いを巡らして一人で楽しんでた結果のことであり、思い付きのレベルを脱していない内容ではありますが、こうした楽しみ方も「スキだらけ」な感じではないかと思っています。

## 『ダークストームのこと』

ヴォルゲラ・ダークストームは、悪魔の三人の師匠でありながら、その三人に惨殺された存在としてよく知られています。ダークストーム惨殺事件は、悪魔の三人がその悪名を最初にアランシアに知らしめた象徴的な事件であり、その点だけでもダークストームの名は、末永くアランシアで語り継がれることになったのです。

しかし、悪い魔法使い養成学校で教鞭をとった（経営も？）教育者だったということ以外の事績はあまり知られていません。

彼自身が一体どういう悪いヤツだったのかということや、悪魔の三人との実力差は実際どうだったのかなど、気になることはたくさんありました。

悪魔の三人とダークストームの関係について、このお話では、『タイタン』の記述を採用し、『トロール牙峠戦争』の「フラットランドの魔法学校」という記述は採用しませんでした。なぜなら、悪い魔法使いを育てる学校なんて、かこさとしの『どろぼうがっこう』じゃないんだし、なによ、その学校を壊滅させたら悪者界の未来を担う俊英たちを一網打尽できる、これは悪者的には大いにまずいと思うのです。もつと密やかにこっそり行つてこそ悪の養成なのではないかと。なので、学校というかたちは取りにくいのではないかと思いました。また、ダークストーム亡きあと、どうも学校を継承した組織や人もいないようだし、そもそも、学校で習うようなことをしているような連中に悪が務まるのかな？と、色々考えて、悪魔の三人の居場所を学校というシステムチックな場所ではなく、ダークストームの内弟子という、猥雑でなんでもありの場所にしてしまいました。

その業界では誰でも知っているヤバイやつであるダークストームは、気が向けば内弟子をとったりしているようだけど、修行内容がヤバ過ぎて下手したら死んでしまうくらい厳しいらしいよ、みたいな。だから、あまり内弟子になりたいがるやつもないし、いるとすれば、本気の悪か、本気の魔法馬鹿しかないという感じです。弟子になるのも狂気が必要という感

じですかね。

であればこそダークストームには、魔法使いの実力も圧倒的で、さらに素敵なことに頭のネジがぶつとんだ存在であつて欲しいと思いましたが、すぐく身勝手に我儘な、強固すぎる自我を持つていて欲しいと思いましたが。

そして、アラゴンはダークストームの身の回りの世話をしながら魔法の手ほどきも受けていたというイメージでした。この話のアラゴンも、『運命の森』の本物同様に、魔法の素質がなく、そのことによって逆に悪魔の三人のように道を踏み外すことなく、ある程度冷静にダークストームと距離を置くことができていたという風に書きました。もつとも、フレダとの関係性などは、どこかおかしいので、周囲の状況に毒されていた部分がまったくないということではなかったようです。

『運命の森』には、難易度もそうですが、どこかほかのFFシリーズにはない、そこはかとない可笑しみや優しさを感じています。また、登場キャラクターの魅力が際立っているゲームブックだとも思っています。初登場のヤズトロモもそうですが、次々と現れるキャラクターのバリエーションは、さらっとした短い付き合いにしかならない割に、妙に心に残るものです。私は中でも、大魔導師アラゴンについて、非常に興味をそそられてきました。魔法の腕前はからつきしなのに、ダークウッドの森で生活しているうさん臭さも、きつと何かあるだろうと思わせる人物でした。今回、そのあたりをかなり好き勝手に想像させていただきました。

## 『ヴァラスカ・ルーについて』

ザラダン・マーの部下たちは、本当にバラエティに富んでいて、好きです。彼らの出世競争とか、彼らを従えてアランシア征服に挑むザラダンが主人公の「ザラダンの野望アランシア版」みたいなものも読んでみたいですね。

私はザラダン軍団の中でも、ヴァラスカ・ルーの造形が特に優れているように思っています。見た目は不潔で醜い大男なのに、実は超優秀なスカ

ウトマンだなんて、主人公を張れるくらいの逸材です。ザラダンへの忠誠は疑うところはないのですが、じゃあ、彼自身の思惑はどうなのか、なぜ、ザラダンに忠誠を誓っているのか、何かしら背景はあるのか、などなどつらつら考えている内にこのお話のルーツは作られました。

彼の心の中には、損得だけではない、割り切れない核のようなものがあり、その部分がザラダンへの忠誠心であったり、優秀なスカウトマンたるひとたらしの部分につながっていくのではないかと妄想しました。この話の彼は、自分が自分であるという部分に敏感な人物であり、そこにこだわることがゆえに、自分の命を的にして真剣勝負をしたりします。そこには損得はありません。自分が満足するかしないかだけです。

### 〜キルデリクほかについて〜

「ジリブランに過ぎたるもの」は、言うまでもなく「家康に過ぎたるものは二つあり」の落書からです。唐の頭は戦槌、キルデリクはジリブランの本多平八、というつもりでした。

キルデリク、バシン、ポンペイウスの三人は、えだぼんに対比する一世代前の三人組ということで妄想していったものです。特にポンペイウスは、そもそもどうして「肉屋のポンペ」なんだろうという私自身の疑問に對する回答でもありました。

多分、元々キルデリクが命名したのは、ポンペイウスというお父さんと同じ名前だったはずなのですが、周囲が短縮して呼んでいるうちに、そのまま名前になってしまったとかですかね。ポンペらしくていいように思います。

えだぼんのセッションでいつも思うのは、エネドラの使うフオーガの神術は、あからさまな強さじゃなくて、対象の気持ちをポジティブにすることでポテンシャルを引き出すという感じがすごくいいんですよね。

今回、フオーガが重要な仕事をしましたが、あくまでもサポート的な働きにとどめたつもりです。たぶん、各人の心に秘めた誇りを尊重するフオーガは、自分自身が主役になることで誇りを満たすタイプの神様ではな

く、それぞれがもつそれぞれの誇りに拠って立つことを、もつとも好ましく、と思う神格なんじゃないかなと思っっています。

### 【謝辞】

この企画を考えて実行していただいた、ぶーすけさん、ありがとうございます。ありがとうございました。

そして、あんじんねこさん（ディレクター）、ぶーすけさん（エネドラ）、たけさん（ダマカス）、ポンペをポンペたらしめてくれた方々すべてに感謝します。

この話は、あんじんねこさんがポンペの家族について質問してくれたことから生まれました。特に感謝します。

そして、『アドバンスト・ファイティング・ファンタジー第2版』を愛するすべての皆様。

日々、この魅力的な世界を、それぞれに深く広く豊かなものにしていただき、本当にありがとうございました。

このお話は、皆様それぞれの意欲的な活動に刺激を受けなければそもそも生まれませんでした。改めましてお礼申し上げます。

ありがとうございました。